



OpenShift Container Platform 4.16

専用のハードウェアおよびドライバーの有効化

OpenShift Container Platform でのハードウェアの有効化に関する説明

OpenShift Container Platform 4.16 専用のハードウェアおよびドライバーの有効化

OpenShift Container Platform でのハードウェアの有効化に関する説明

Legal Notice

Copyright © 2025 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

Abstract

このドキュメントでは、OpenShift Container Platform でのハードウェアの有効化に関して解説します。

Table of Contents

第1章 専用のハードウェアおよびドライバーの有効化	3
第2章 DRIVER TOOLKIT	4
2.1. DRIVER TOOLKIT について	4
2.2. DRIVER TOOLKIT コンテナイメージのプル	5
2.3. DRIVER TOOLKIT の使用	6
2.4. 関連情報	10
第3章 NODE FEATURE DISCOVERY OPERATOR	11
3.1. NODE FEATURE DISCOVERY OPERATOR のインストール	11
3.2. NODE FEATURE DISCOVERY OPERATOR の使用	13
3.3. NODE FEATURE DISCOVERY OPERATOR の設定	20
3.4. NODEFEATURERULE カスタムリソースについて	25
3.5. NODEFEATURERULE カスタムリソースの使用	25
3.6. NFD トポロジーアップデートの使用	26
第4章 KERNEL MODULE MANAGEMENT OPERATOR	31
4.1. KERNEL MODULE MANAGEMENT OPERATOR について	31
4.2. KERNEL MODULE MANAGEMENT OPERATOR のインストール	31
4.3. KERNEL MODULE MANAGEMENT OPERATOR の設定	35
4.4. KERNEL MODULE MANAGEMENT OPERATOR のアンインストール	38
4.5. カーネルモジュールのデプロイ	39
4.6. セキュリティーおよびパーミッション	41
4.7. ツリー内モジュールをツリー外モジュールに置き換える	42
4.8. インツリー依存関係のシンボリックリンク	45
4.9. KMOD イメージの作成	46
4.10. KERNEL MODULE MANAGEMENT (KMM) による署名の使用	49
4.11. SECUREBOOT の鍵の追加	50
4.12. ビルド済みイメージ内の KMODS への署名	51
4.13. KMOD イメージのビルドと署名	52
4.14. KMM ハブおよびスポーク	54
4.15. カーネルモジュールのアップグレードのカスタマイズ	58
4.16. DAY 1 カーネルモジュールのロード	60
4.17. デバッグとトラブルシューティング	62
4.18. KMM ファームウェアのサポート	63
4.19. DAY 0 から DAY 2 までの KMOD インストール	64
4.20. KMM のトラブルシューティング	66

第1章 専用のハードウェアおよびドライバーの有効化

Driver Toolkit (DTK) は、OpenShift Container Platform ペイロードのコンテナイメージであり、ドライバーコンテナを構築するベースイメージとして使用することが目的です。Driver Toolkit イメージには、カーネルモジュールをビルドまたはインストールするための依存関係として一般的に必要なカーネルパッケージと、ドライバーコンテナに必要ないくつかのツールが含まれています。これらのパッケージのバージョンは、対応する OpenShift Container Platform リリースの RHCOS ノードで実行されているカーネルのバージョンと一致します。

ドライバーコンテナは、コンテナオペレーティングシステム (Red Hat Enterprise Linux CoreOS (RHCOS)) でツリー外のカーネルモジュールとドライバーをビルドおよびデプロイメントするために使用されるコンテナイメージです。カーネルモジュールおよびドライバーは、レベルの高い権限で、オペレーティングシステムカーネル内で実行されるソフトウェアライブラリーです。また、カーネル機能の拡張や、新しいデバイスの制御に必要なハードウェア固有のコードを提供します。例としては、field-programmable gate arrays (FPGA) や graphics processing units (GPU) などのハードウェアデバイスや、ソフトウェア定義のストレージソリューションなどがあります。これらはすべて、クライアントマシンでカーネルモジュールを必要とします。ドライバーコンテナは、OpenShift Container Platform デプロイメントでこれらのテクノロジーを有効にするために使用されるソフトウェアスタックの最初の階層です。

第2章 DRIVER TOOLKIT

Driver Toolkit について、およびドライバーコンテナのベースイメージとしてそれを使用して、OpenShift Container Platform デプロイメントで特別なソフトウェアおよびハードウェアデバイスを有効にする方法を説明します。

2.1. DRIVER TOOLKIT について

背景情報

Driver Toolkit は、ドライバーコンテナをビルドできるベースイメージとして使用する OpenShift Container Platform ペイロードのコンテナイメージです。Driver Toolkit イメージには、カーネルモジュールをビルドまたはインストールするための依存関係として一般的に必要なカーネルパッケージと、ドライバーコンテナに必要ないくつかのツールが含まれています。これらのパッケージのバージョンは、対応する OpenShift Container Platform リリースの Red Hat Enterprise Linux CoreOS (RHCOS) ノードで実行されているカーネルバージョンと同じです。

ドライバーコンテナは、RHCOS などのコンテナオペレーティングシステムで out-of-tree カーネルモジュールをビルドしてデプロイするのに使用するコンテナイメージです。カーネルモジュールおよびドライバーは、レベルの高い権限で、オペレーティングシステムカーネル内で実行されるソフトウェアライブラリーです。また、カーネル機能の拡張や、新しいデバイスの制御に必要なハードウェア固有のコードを提供します。例として、Field Programmable Gate Arrays (FPGA) または GPU などのハードウェアデバイスや、クライアントマシンでカーネルモジュールを必要とする Lustre parallel ファイルシステムなどのソフトウェア定義のストレージ (SDS) ソリューションなどがあります。ドライバーコンテナは、Kubernetes でこれらの技術を有効にするために使用されるソフトウェアスタックの最初の層です。

Driver Toolkit のカーネルパッケージのリストには、以下とその依存関係が含まれます。

- **kernel-core**
- **kernel-devel**
- **kernel-headers**
- **kernel-modules**
- **kernel-modules-extra**

また、Driver Toolkit には、対応するリアルタイムカーネルパッケージも含まれています。

- **kernel-rt-core**
- **kernel-rt-devel**
- **kernel-rt-modules**
- **kernel-rt-modules-extra**

Driver Toolkit には、カーネルモジュールのビルドおよびインストールに一般的に必要なツールが複数あります。たとえば、以下が含まれます。

- **elfutils-libelf-devel**
- **kmod**

- **binutilskabi-dw**
- **kernel-abi-whitelists**
- 上記の依存関係

目的

Driver Toolkit がリリースされる前は、[エンタイトルメントのあるビルド](#)を使用するか、ホストの **machine-os-content** のカーネル RPM からインストールして、Pod またはビルド設定のカーネルパッケージを OpenShift Container Platform にインストールできていました。Driver Toolkit を使用すると、エンタイトルメントステップがなくなりプロセスが単純化され、Pod で machine-os-content にアクセスする特権操作を回避できます。Driver Toolkit は、プレリリース済みの OpenShift Container Platform バージョンにアクセスできるパートナーも使用でき、今後の OpenShift Container Platform リリース用にハードウェアデバイスのドライバーコンテナを事前にビルドできます。

Driver Toolkit は Kernel Module Management (KMM) でも使用されます。Kernel Module Management (KMM) は、現在 OperatorHub でコミュニティ Operator として利用できます。KMM は、out-of-tree およびサードパーティーのカーネルドライバー、および基礎となるオペレーティングシステムのサポートソフトウェアをサポートします。ユーザーは、KMM のレシピを作成してドライバーコンテナを構築してデプロイしたり、デバイスプラグインやメトリックなどのソフトウェアをサポートしたりできます。モジュールには、ビルド設定を追加して、Driver Toolkit をベースにドライバーコンテナをビルドできます。または KMM で事前ビルドされたドライバーコンテナをデプロイできます。

2.2. DRIVER TOOLKIT コンテナイメージのプル

driver-toolkit イメージは、[Red Hat Ecosystem Catalog](#) および [OpenShift Container Platform リリースペイロードのコンテナイメージ](#) セクションから入手できます。OpenShift Container Platform の最新のマイナーリリースに対応するイメージは、カタログのバージョン番号でタグ付けされます。特定のリリースのイメージ URL は、**oc adm** CLI コマンドを使用して確認できます。

2.2.1. registry.redhat.io からの Driver Toolkit コンテナイメージのプル

podman または OpenShift Container Platform を使用して **registry.redhat.io** から **driver-toolkit** イメージをプルする手順は、[Red Hat Ecosystem Catalog](#) を参照してください。最新のマイナーリリースのドライバーツールキットイメージは、**registry.redhat.io** のマイナーリリースバージョンでタグ付けされます (例: **registry.redhat.io/openshift4/driver-toolkit-rhel8:v4.16**)。

2.2.2. ペイロードでの Driver Toolkit イメージ URL の検索

前提条件

- [Red Hat OpenShift Cluster Manager](#) からイメージプルシークレット を取得している。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。

手順

1. **oc adm** コマンドを使用して、特定のリリースに対応する **driver-toolkit** のイメージ URL を抽出します。
 - x86 イメージの場合、コマンドは次のとおりです。

```
$ oc adm release info quay.io/openshift-release-dev/ocp-release:4.16.z-x86_64 --image-for=driver-toolkit
```

- ARM イメージの場合、コマンドは次のとおりです。

```
$ oc adm release info quay.io/openshift-release-dev/ocp-release:4.16.z-aarch64 --
image-for=driver-toolkit
```

出力例

```
quay.io/openshift-release-dev/ocp-v4.0-art-
dev@sha256:b53883ca2bac5925857148c4a1abc300ced96c222498e3bc134fe7ce3a1dd404
```

2. OpenShift Container Platform のインストールに必要なプルシークレットなど、有効なプルシークレットを使用してこのイメージを取得します。

```
$ podman pull --authfile=path/to/pullsecret.json quay.io/openshift-release-dev/ocp-v4.0-art-
dev@sha256:<SHA>
```

2.3. DRIVER TOOLKIT の使用

たとえば、Driver Toolkit は **simple-kmod** と呼ばれる単純なカーネルモジュールを構築するベースイメージとして使用できます。



注記

Driver Toolkit には、カーネルモジュールに署名するために必要な依存関係である **openssl**、**mokutil**、および **keyutils** が含まれています。ただし、この例では、**simple-kmod** カーネルモジュールは署名されていないため、**Secure Boot** が有効になっているシステムにはロードできません。

2.3.1. クラスターでの **simple-kmod** ドライバーコンテナをビルドし、実行します。

前提条件

- OpenShift Container Platform クラスターが実行中である。
- クラスターのイメージレジストリー Operator の状態を **Managed** に設定している。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- **cluster-admin** 権限があるユーザーとして OpenShift CLI にログインしている。

手順

namespace を作成します。以下に例を示します。

```
$ oc new-project simple-kmod-demo
```

1. YAML は、**simple-kmod** ドライバーコンテナイメージを保存する **ImageStream** と、コンテナをビルドする **BuildConfig** を定義します。この YAML を **0000-buildconfig.yaml.template** として保存します。

```
apiVersion: image.openshift.io/v1
kind: ImageStream
```

```

metadata:
  labels:
    app: simple-kmod-driver-container
    name: simple-kmod-driver-container
    namespace: simple-kmod-demo
spec: {}
---
apiVersion: build.openshift.io/v1
kind: BuildConfig
metadata:
  labels:
    app: simple-kmod-driver-build
    name: simple-kmod-driver-build
    namespace: simple-kmod-demo
spec:
  nodeSelector:
    node-role.kubernetes.io/worker: ""
  runPolicy: "Serial"
  triggers:
    - type: "ConfigChange"
    - type: "ImageChange"
  source:
    dockerfile: |
      ARG DTK
      FROM ${DTK} as builder

      ARG KVER

      WORKDIR /build/

      RUN git clone https://github.com/openshift-psap/simple-kmod.git

      WORKDIR /build/simple-kmod

      RUN make all install KVER=${KVER}

      FROM registry.redhat.io/ubi8/ubi-minimal

      ARG KVER

      # Required for installing `modprobe`
      RUN microdnf install kmod

      COPY --from=builder /lib/modules/${KVER}/simple-kmod.ko /lib/modules/${KVER}/
      COPY --from=builder /lib/modules/${KVER}/simple-procfs-kmod.ko
      /lib/modules/${KVER}/
      RUN depmod ${KVER}
  strategy:
    dockerStrategy:
      buildArgs:
        - name: KMODVER
          value: DEMO
        - name: DTK
          value: quay.io/openshift-release-dev/ocp-v4.0-art-
x86_64 --image-for=driver-toolkit

```

```
dev@sha256:34864ccd2f4b6e385705a730864c04a40908e57acede44457a783d739e377cae
  - name: KVER
    value: 4.18.0-372.26.1.el8_6.x86_64
output:
  to:
    kind: ImageStreamTag
    name: simple-kmod-driver-container:demo
```

2. 以下のコマンドで、“DRIVER_TOOLKIT_IMAGE”の代わりに、実行中の OpenShift Container Platform バージョンのドライバーツールキットイメージを置き換えます。

```
$ OCP_VERSION=$(oc get clusterversion/version -ojsonpath={.status.desired.version})
```

```
$ DRIVER_TOOLKIT_IMAGE=$(oc adm release info $OCP_VERSION --image-for=driver-toolkit)
```

```
$ sed "s#DRIVER_TOOLKIT_IMAGE#{DRIVER_TOOLKIT_IMAGE}#" 0000-buildconfig.yaml.template > 0000-buildconfig.yaml
```

3. 以下でイメージストリームおよびビルド設定を作成します。

```
$ oc create -f 0000-buildconfig.yaml
```

4. ビルダー Pod が正常に完了したら、ドライバーコンテナイメージを **DaemonSet** としてデプロイします。
 - a. ホスト上でカーネルモジュールを読み込むには、特権付きセキュリティーコンテキストでドライバーコンテナを実行する必要があります。以下の YAML ファイルには、ドライバーコンテナを実行するための RBAC ルールおよび **DaemonSet** が含まれます。この YAML を **1000-drivercontainer.yaml** として保存します。

```
apiVersion: v1
kind: ServiceAccount
metadata:
  name: simple-kmod-driver-container
---
apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1
kind: Role
metadata:
  name: simple-kmod-driver-container
rules:
- apiGroups:
  - security.openshift.io
  resources:
  - securitycontextconstraints
  verbs:
  - use
  resourceNames:
  - privileged
---
apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1
kind: RoleBinding
metadata:
  name: simple-kmod-driver-container
```

```

roleRef:
  apiGroup: rbac.authorization.k8s.io
  kind: Role
  name: simple-kmod-driver-container
subjects:
- kind: ServiceAccount
  name: simple-kmod-driver-container
userNames:
- system:serviceaccount:simple-kmod-demo:simple-kmod-driver-container
---
apiVersion: apps/v1
kind: DaemonSet
metadata:
  name: simple-kmod-driver-container
spec:
  selector:
    matchLabels:
      app: simple-kmod-driver-container
  template:
    metadata:
      labels:
        app: simple-kmod-driver-container
    spec:
      serviceAccount: simple-kmod-driver-container
      serviceAccountName: simple-kmod-driver-container
      containers:
      - image: image-registry.openshift-image-registry.svc:5000/simple-kmod-
        demo/simple-kmod-driver-container:demo
        name: simple-kmod-driver-container
        imagePullPolicy: Always
        command: [sleep, infinity]
        lifecycle:
          postStart:
            exec:
              command: ["modprobe", "-v", "-a", "simple-kmod", "simple-procfs-kmod"]
          preStop:
            exec:
              command: ["modprobe", "-r", "-a", "simple-kmod", "simple-procfs-kmod"]
        securityContext:
          privileged: true
      nodeSelector:
        node-role.kubernetes.io/worker: ""

```

b. RBAC ルールおよびデーモンセットを作成します。

```
$ oc create -f 1000-drivercontainer.yaml
```

5. Pod がワーカーノードで実行された後に、**simple_kmod** カーネルモジュールが **lsmod** のホストマシンで正常に読み込まれることを確認します。

a. Pod が実行されていることを確認します。

```
$ oc get pod -n simple-kmod-demo
```

出力例

NAME	READY	STATUS	RESTARTS	AGE
simple-kmod-driver-build-1-build	0/1	Completed	0	6m
simple-kmod-driver-container-b22fd	1/1	Running	0	40s
simple-kmod-driver-container-jz9vn	1/1	Running	0	40s
simple-kmod-driver-container-p45cc	1/1	Running	0	40s

- b. ドライバーコンテナ Pod で **lsmod** コマンドを実行します。

```
$ oc exec -it pod/simple-kmod-driver-container-p45cc -- lsmod | grep simple
```

出力例

```
simple_procfs_kmod    16384 0
simple_kmod           16384 0
```

2.4. 関連情報

- クラスターのレジストリーストレージの設定に関する詳細は、[OpenShift Container Platform の Image Registry Operator](#) を参照してください。

第3章 NODE FEATURE DISCOVERY OPERATOR

Node Feature Discovery (NFD) Operator および、これを使用して Node Feature Discovery (ハードウェア機能やシステム設定を検出するための Kubernetes アドオン) をオーケストレーションしてノードレベルの情報を公開する方法を説明します。

Node Feature Discovery Operator (NFD) は、ハードウェア固有の情報でノードにラベルを付け、OpenShift Container Platform クラスターのハードウェア機能と設定の検出を管理します。NFD は、PCI カード、カーネル、オペレーティングシステムのバージョンなど、ノード固有の属性でホストにラベルを付けます。

NFD Operator は、“Node Feature Discovery” と検索して Operator Hub で確認できます。

3.1. NODE FEATURE DISCOVERY OPERATOR のインストール

Node Feature Discovery (NFD) Operator は、NFD デモンセットの実行に必要なすべてのリソースをオーケストレーションします。クラスター管理者は、OpenShift Container Platform CLI または Web コンソールを使用して NFD Operator をインストールできます。

3.1.1. CLI を使用した NFD Operator のインストール

クラスター管理者は、CLI を使用して NFD Operator をインストールできます。

前提条件

- OpenShift Container Platform クラスター。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- **cluster-admin** 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. NFD Operator の namespace を作成します。
 - a. **openshift-nfd** namespace を定義する以下の **Namespace** カスタムリソース (CR) を作成し、YAML を **nfd-namespace.yaml** ファイルに保存します。**cluster-monitoring** を **"true"** に設定します。

```
apiVersion: v1
kind: Namespace
metadata:
  name: openshift-nfd
  labels:
    name: openshift-nfd
    openshift.io/cluster-monitoring: "true"
```

- b. 以下のコマンドを実行して namespace を作成します。

```
$ oc create -f nfd-namespace.yaml
```

2. 以下のオブジェクトを作成して、直前の手順で作成した namespace に NFD Operator をインストールします。
 - a. 以下の **OperatorGroup** CR を作成し、YAML を **nfd-operatorgroup.yaml** ファイルに保存

- d. 以下の **OperatorGroup** CR を作成し、YAML を **nfd-operatorgroup.yaml** ファイルに保存します。

```
apiVersion: operators.coreos.com/v1
kind: OperatorGroup
metadata:
  generateName: openshift-nfd-
  name: openshift-nfd
  namespace: openshift-nfd
spec:
  targetNamespaces:
    - openshift-nfd
```

- b. 以下のコマンドを実行して **OperatorGroup** CR を作成します。

```
$ oc create -f nfd-operatorgroup.yaml
```

- c. 以下の **Subscription** CR を作成し、YAML を **nfd-sub.yaml** ファイルに保存します。

Subscription の例

```
apiVersion: operators.coreos.com/v1alpha1
kind: Subscription
metadata:
  name: nfd
  namespace: openshift-nfd
spec:
  channel: "stable"
  installPlanApproval: Automatic
  name: nfd
  source: redhat-operators
  sourceNamespace: openshift-marketplace
```

- d. 以下のコマンドを実行して Subscription オブジェクトを作成します。

```
$ oc create -f nfd-sub.yaml
```

- e. **openshift-nfd** プロジェクトに切り替えます。

```
$ oc project openshift-nfd
```

検証

- Operator のデプロイメントが正常に行われたことを確認するには、以下を実行します。

```
$ oc get pods
```

出力例

```
NAME                                READY STATUS RESTARTS AGE
nfd-controller-manager-7f86ccfb58-vgr4x 2/2   Running 0      10m
```

正常にデプロイされると、**Running** ステータスが表示されます。

3.1.2. Web コンソールでの NFD Operator のインストール

クラスター管理者は、Web コンソールを使用して NFD Operator をインストールできます。

手順

1. OpenShift Container Platform Web コンソールで、**Operators → OperatorHub** をクリックします。
2. 利用可能な Operator の一覧から **Node Feature Discovery** を選択してから **Install** をクリックします。
3. **Install Operator** ページで **A specific namespace on the cluster** を選択し、**Install** をクリックします。namespace が作成されるため、これを作成する必要はありません。

検証

以下のように、NFD Operator が正常にインストールされていることを確認します。

1. **Operators → Installed Operators** ページに移動します。
2. **Status** が **InstallSucceeded** の **Node Feature Discovery** が **openshift-nfd** プロジェクトにリスト表示されていることを確認します。



注記

インストール時に、Operator は **Failed** ステータスを表示する可能性があります。インストールが後に **InstallSucceeded** メッセージを出して正常に実行される場合は、**Failed** メッセージを無視できます。

トラブルシューティング

Operator がインストール済みとして表示されない場合に、さらにトラブルシューティングを実行します。

1. **Operators → Installed Operators** ページに移動し、**Operator Subscriptions** および **Install Plans** タブで **Status** にエラーがあるかどうかを検査します。
2. **Workloads → Pods** ページに移動し、**openshift-nfd** プロジェクトで Pod のログを確認します。

3.2. NODE FEATURE DISCOVERY OPERATOR の使用

Node Feature Discovery (NFD) Operator は、**NodeFeatureDiscovery** カスタムリソース (CR) を監視して Node-Feature-Discovery デモンセットの実行に必要な全リソースをオーケストレーションします。**NodeFeatureDiscovery** CR に基づいて、Operator は選択された namespace にオペランド (NFD) コンポーネントを作成します。CR を編集して、別の namespace、イメージ、イメージプルポリシー、**nfd-worker-conf** config map などのオプションを使用できます。

クラスター管理者は、OpenShift CLI (**oc**) または Web コンソールを使用して **NodeFeatureDiscovery** CR を作成できます。



注記

バージョン 4.12 以降、**NodeFeatureDiscovery** CR の **operand.image** フィールドが必須になりました。NFD Operator が Operator Lifecycle Manager (OLM) を使用してデプロイされる場合、**operand.image** フィールドは OLM によって自動的に設定されます。OpenShift Container Platform CLI または OpenShift Container Platform Web コンソールを使用して **NodeFeatureDiscovery** CR を作成する場合は、**operand.image** フィールドを明示的に設定する必要があります。

3.2.1. CLI を使用した NodeFeatureDiscovery CR の作成

クラスター管理者は、OpenShift CLI (**oc**) を使用して **NodeFeatureDiscovery** CR インスタンスを作成できます。



注記

spec.operand.image 設定では、OpenShift Container Platform リリース 4.13 以降で使用するために **-rhel9** イメージを定義する必要があります。

次の例は、正しいイメージを取得するために **-rhel9** を使用方法を示しています。

前提条件

- OpenShift Container Platform クラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- **cluster-admin** 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- NFD Operator をインストールしました。

手順

1. **NodeFeatureDiscovery** CR を作成します。

NodeFeatureDiscovery CR の例

```
apiVersion: nfd.openshift.io/v1
kind: NodeFeatureDiscovery
metadata:
  name: nfd-instance
  namespace: openshift-nfd
spec:
  instance: "" # instance is empty by default
  topologyupdater: false # False by default
  operand:
    image: registry.redhat.io/openshift4/ose-node-feature-discovery-rhel9:v4.16 1
    imagePullPolicy: Always
  workerConfig:
    configData: |
      core:
        # labelWhiteList:
        # noPublish: false
        sleepInterval: 60s
```

```

# sources: [all]
# klog:
#  addDirHeader: false
#  alsoLogToStderr: false
#  logBacktraceAt:
#  logToStderr: true
#  skipHeaders: false
#  stderrThreshold: 2
#  v: 0
#  vmodule:
##  NOTE: the following options are not dynamically run-time configurable
##        and require a nfd-worker restart to take effect after being changed
#  logDir:
#  logFile:
#  logFileMaxSize: 1800
#  skipLogHeaders: false
sources:
  cpu:
    cpuid:
#    NOTE: whitelist has priority over blacklist
    attributeBlacklist:
      - "BMI1"
      - "BMI2"
      - "CLMUL"
      - "CMOV"
      - "CX16"
      - "ERMS"
      - "F16C"
      - "HTT"
      - "LZCNT"
      - "MMX"
      - "MMXEXT"
      - "NX"
      - "POPCNT"
      - "RDRAND"
      - "RDSEED"
      - "RDTSCP"
      - "SGX"
      - "SSE"
      - "SSE2"
      - "SSE3"
      - "SSE4.1"
      - "SSE4.2"
      - "SSSE3"
    attributeWhitelist:
  kernel:
    kconfigFile: "/path/to/kconfig"
    configOpts:
      - "NO_HZ"
      - "X86"
      - "DMI"
  pci:
    deviceClassWhitelist:
      - "0200"
      - "03"
      - "12"

```

```

deviceLabelFields:
  - "class"
customConfig:
  configData: |
    - name: "more.kernel.features"
      matchOn:
        - loadedKMod: ["example_kmod3"]

```

❶ **operand.image** フィールドは必須です。

2. 次のコマンドを実行して、**NodeFeatureDiscovery** CR を作成します。

```
$ oc apply -f <filename>
```

検証

1. 次のコマンドを実行して、**NodeFeatureDiscovery** CR が作成されたことを確認します。

```
$ oc get pods
```

出力例

NAME	READY	STATUS	RESTARTS	AGE
nfd-controller-manager-7f86ccfb58-vgr4x	2/2	Running	0	11m
nfd-master-hcn64	1/1	Running	0	60s
nfd-master-lnnxx	1/1	Running	0	60s
nfd-master-mp6hr	1/1	Running	0	60s
nfd-worker-vgc29	1/1	Running	0	60s
nfd-worker-xqbws	1/1	Running	0	60s

正常にデプロイされると、**Running** ステータスが表示されます。

3.2.2. 非接続環境で CLI を使用した NodeFeatureDiscovery CR の作成

クラスター管理者は、OpenShift CLI (**oc**) を使用して **NodeFeatureDiscovery** CR インスタンスを作成できます。

前提条件

- OpenShift Container Platform クラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- **cluster-admin** 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- NFD Operator をインストールしました。
- 必要なイメージを含むミラーレジストリーにアクセスできる。
- **skopeo** CLI ツールをインストールしている。

手順

1. レジストリーイメージのダイジェストを決定します。

- a. 以下のコマンドを実行します。

```
$ skopeo inspect docker://registry.redhat.io/openshift4/ose-node-feature-discovery:
<openshift_version>
```

コマンドの例

```
$ skopeo inspect docker://registry.redhat.io/openshift4/ose-node-feature-discovery:v4.12
```

- b. 出力を調べてイメージダイジェストを識別します。

出力例

```
{
  ...
  "Digest":
  "sha256:1234567890abcdef1234567890abcdef1234567890abcdef",
  ...
}
```

2. 次のコマンドを実行して、**skopeo** CLI ツールを使用して、**registry.redhat.io** からミラーレジストリーにイメージをコピーします。

```
skopeo copy docker://registry.redhat.io/openshift4/ose-node-feature-
discovery@<image_digest> docker://<mirror_registry>/openshift4/ose-node-feature-
discovery@<image_digest>
```

コマンドの例

```
skopeo copy docker://registry.redhat.io/openshift4/ose-node-feature-
discovery@sha256:1234567890abcdef1234567890abcdef1234567890abcd
ef docker://<your-mirror-registry>/openshift4/ose-node-feature-
discovery@sha256:1234567890abcdef1234567890abcdef1234567890abcd
ef
```

3. **NodeFeatureDiscovery** CR を作成します。

NodeFeatureDiscovery CR の例

```
apiVersion: nfd.openshift.io/v1
kind: NodeFeatureDiscovery
metadata:
  name: nfd-instance
spec:
  operand:
    image: <mirror_registry>/openshift4/ose-node-feature-discovery@<image_digest> 1
    imagePullPolicy: Always
  workerConfig:
    configData: |
      core:
        # labelWhiteList:
```

```

# noPublish: false
  sleepInterval: 60s
# sources: [all]
# klog:
#   addDirHeader: false
#   alsologtostderr: false
#   logBacktraceAt:
#   logtostderr: true
#   skipHeaders: false
#   stderrthreshold: 2
#   v: 0
#   vmodule:
## NOTE: the following options are not dynamically run-time configurable
##       and require a nfd-worker restart to take effect after being changed
#   logDir:
#   logFile:
#   logFileMaxSize: 1800
#   skipLogHeaders: false
sources:
  cpu:
  cpuid:
# NOTE: whitelist has priority over blacklist
  attributeBlacklist:
    - "BMI1"
    - "BMI2"
    - "CLMUL"
    - "CMOV"
    - "CX16"
    - "ERMS"
    - "F16C"
    - "HTT"
    - "LZCNT"
    - "MMX"
    - "MMXEXT"
    - "NX"
    - "POPCNT"
    - "RDRAND"
    - "RDSEED"
    - "RDTSCP"
    - "SGX"
    - "SSE"
    - "SSE2"
    - "SSE3"
    - "SSE4.1"
    - "SSE4.2"
    - "SSSE3"
  attributeWhitelist:
kernel:
  kconfigFile: "/path/to/kconfig"
  configOpts:
    - "NO_HZ"
    - "X86"
    - "DMI"
pci:
  deviceClassWhitelist:
    - "0200"

```

```

- "03"
- "12"
deviceLabelFields:
- "class"
customConfig:
  configData: |
    - name: "more.kernel.features"
      matchOn:
        - loadedKMod: ["example_kmod3"]

```

❶ **operand.image** フィールドは必須です。

4. 次のコマンドを実行して、**NodeFeatureDiscovery** CR を作成します。

```
$ oc apply -f <filename>
```

検証

1. 次のコマンドを実行して、**NodeFeatureDiscovery** CR のステータスを確認します。

```
$ oc get nodefeaturediscovery nfd-instance -o yaml
```

2. 次のコマンドを実行して、Pod が **ImagePullBackOff** エラーなしで実行していることを確認します。

```
$ oc get pods -n <nfd_namespace>
```

3.2.3. Web コンソールを使用した **NodeFeatureDiscovery** CR の作成

クラスター管理者は、OpenShift Container Platform Web コンソールを使用して **NodeFeatureDiscovery** CR を作成できます。

前提条件

- OpenShift Container Platform クラスターにアクセスできる。
- **cluster-admin** 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- NFD Operator をインストールしました。

手順

1. **Operators** → **Installed Operators** ページに移動します。
2. **Node Feature Discovery** セクションの **Provided APIs** で、**Create instance** をクリックします。
3. **NodeFeatureDiscovery** CR の値を編集します。
4. **Create** をクリックします。



注記

バージョン 4.12 以降、**NodeFeatureDiscovery** CR の **operand.image** フィールドが必須になりました。NFD Operator が Operator Lifecycle Manager (OLM) を使用してデプロイされる場合、**operand.image** フィールドは OLM によって自動的に設定されます。OpenShift Container Platform CLI または OpenShift Container Platform Web コンソールを使用して **NodeFeatureDiscovery** CR を作成する場合は、**operand.image** フィールドを明示的に設定する必要があります。

3.3. NODE FEATURE DISCOVERY OPERATOR の設定

3.3.1. コア

core セクションには、共通の設定が含まれており、これは特定の機能ソースに固有のものではありません。

core.sleepInterval

core.sleepInterval は、次に機能検出または再検出するまでの間隔を指定するので、ノードの再ラベル付けの間隔も指定します。正の値以外は、無限のスリープ状態を意味するので、再検出や再ラベル付けは行われません。

この値は、指定されている場合は、非推奨の **--sleep-interval** コマンドラインフラグでオーバーライドされます。

使用例

```
core:
  sleepInterval: 60s 1
```

デフォルト値は **60s** です。

core.sources

core.sources は、有効な機能ソースのリストを指定します。特殊な値 **all** はすべての機能ソースを有効にします。

この値は、指定されている場合は非推奨の **--sources** コマンドラインフラグによりオーバーライドされます。

デフォルト: **[all]**

使用例

```
core:
  sources:
    - system
    - custom
```

core.labelWhiteList

core.labelWhiteList は、正規表現を指定してラベル名に基づいて機能ラベルをフィルターします。一致しないラベルは公開されません。

正規表現は、ラベルのベース名 ('/' の後に名前の一部) だけを照合します。ラベルの接頭辞または namespace は省略されます。

この値は、指定されている場合は、非推奨の **--label-whitelist** コマンドラインフラグでオーバーライドされます。

デフォルト: **null**

使用例

```
core:
  labelWhiteList: '^cpu-cpuid'
```

core.noPublish

core.noPublish を **true** に設定すると、**nfd-master** による全通信が無効になります。これは実質的にはドライランフラグです。**nfd-worker** は通常通り機能検出を実行しますが、ラベル付け要求は **nfd-master** に送信されます。

この値は、指定されている場合には、**--no-publish** コマンドラインフラグによりオーバーライドされます。

以下に例を示します。

使用例

```
core:
  noPublish: true ❶
```

デフォルト値は **false** です。

core.klog

以下のオプションは、実行時にほとんどを動的に調整できるロガー設定を指定します。

ロガーオプションはコマンドラインフラグを使用して指定することもできますが、対応する設定ファイルオプションよりもこちらが優先されます。

core.klog.addDirHeader

true に設定すると、**core.klog.addDirHeader** がファイルディレクトリーをログメッセージのヘッダーに追加します。

デフォルト: **false**

ランタイム設定可能: yes

core.klog.alsologtostderr

標準エラーおよびファイルにロギングします。

デフォルト: **false**

ランタイム設定可能: yes

core.klog.logBacktraceAt

file:N の行にロギングが到達すると、スタックトレースを出力します。

デフォルト: **empty**

ランタイム設定可能: yes

core.klog.logDir

空でない場合は、このディレクトリーにログファイルを書き込みます。

デフォルト: **empty**

ランタイム設定可能: no

core.klog.logFile

空でない場合は、このログファイルを使用します。

デフォルト: **empty**

ランタイム設定可能: no

core.klog.logFileMaxSize

core.klog.logFileMaxSize は、ログファイルの最大サイズを定義します。単位はメガバイトです。値が **0** の場合には、最大ファイルサイズは無制限になります。

デフォルト: **1800**

ランタイム設定可能: no

core.klog.logtostderr

ファイルの代わりに標準エラーにログを記録します。

デフォルト: **true**

ランタイム設定可能: yes

core.klog.skipHeaders

core.klog.skipHeaders が **true** に設定されている場合には、ログメッセージでヘッダー接頭辞を使用しません。

デフォルト: **false**

ランタイム設定可能: yes

core.klog.skipLogHeaders

core.klog.skipLogHeaders が **true** に設定されている場合は、ログファイルを表示する時にヘッダーは使用されません。

デフォルト: **false**

ランタイム設定可能: no

core.klog.stderrthreshold

このしきい値以上のログは stderr になります。

デフォルト: **2**

ランタイム設定可能: yes

core.klog.v

core.klog.v はログレベルの詳細度の数値です。

デフォルト: **0**

ランタイム設定可能: yes

core.klog.vmodule

core.klog.vmodule は、ファイルでフィルターされたロギングの **pattern=N** 設定 (コンマ区切りのリスト) です。

デフォルト: **empty**

ランタイム設定可能: yes

3.3.2. ソース

sources セクションには、機能ソース固有の設定パラメーターが含まれます。

sources.cpu.cpuid.attributeBlacklist

このオプションに記述されている **cpuid** 機能は公開されません。

この値は、指定されている場合は **sources.cpu.cpuid.attributeWhitelist** によってオーバーライドされます。

デフォルト: **[BMI1, BMI2, CLMUL, CMOV, CX16, ERMS, F16C, HTT, LZCNT, MMX, MMXEXT, NX, POPCNT, RDRAND, RDSEED, RDTSCP, SGX, SGXLC, SSE, SSE2, SSE3, SSE4.1, SSE4.2, SSSE3]**

使用例

```
sources:
  cpu:
    cpuid:
      attributeBlacklist: [MMX, MMXEXT]
```

sources.cpu.cpuid.attributeWhitelist

このオプションに記述されている **cpuid** 機能のみを公開します。

sources.cpu.cpuid.attributeWhitelist は **sources.cpu.cpuid.attributeBlacklist** よりも優先されます。

デフォルト: **empty**

使用例

```
sources:
  cpu:
    cpuid:
      attributeWhitelist: [AVX512BW, AVX512CD, AVX512DQ, AVX512F, AVX512VL]
```

sources.kernel.kconfigFile

sources.kernel.kconfigFile は、カーネル設定ファイルのパスです。空の場合には、NFD は一般的な標準場所で検索を実行します。

デフォルト: **empty**

使用例

```
sources:
  kernel:
    kconfigFile: "/path/to/kconfig"
```

sources.kernel.configOpts

sources.kernel.configOpts は、機能ラベルとして公開するカーネル設定オプションを表します。

デフォルト: **[NO_HZ、NO_HZ_IDLE、NO_HZ_FULL、PREEMPT]**

使用例

```
sources:
  kernel:
    configOpts: [NO_HZ, X86, DMI]
```

sources.pci.deviceClassWhitelist

sources.pci.deviceClassWhitelist は、ラベルを公開する [PCI デバイスクラス ID](#) の一覧です。メインクラスとしてののみ (例: **03**) か、完全なクラスサブクラスの組み合わせ (例: **0300**) として指定できます。前者は、すべてのサブクラスが許可されていることを意味します。ラベルの形式は、**deviceLabelFields** でさらに設定できます。

デフォルト: **["03", "0b40", "12"]**

使用例

```
sources:
  pci:
    deviceClassWhitelist: ["0200", "03"]
```

sources.pci.deviceLabelFields

sources.pci.deviceLabelFields は、機能ラベルの名前を構築する時に使用する PCI ID フィールドのセットです。有効なフィールドは **class**、**vendor**、**device**、**subsystem_vendor** および **subsystem_device** です。

デフォルト: **[class, vendor]**

使用例

```
sources:
  pci:
    deviceLabelFields: [class, vendor, device]
```

上記の設定例では、NFD は **feature.node.kubernetes.io/pci-<class-id>_<vendor-id>_<device-id>.present=true** などのラベルを公開します。

sources.usb.deviceClassWhitelist

sources.usb.deviceClassWhitelist は、機能ラベルを公開する [USB デバイスクラス ID](#) の一覧です。ラベルの形式は、**deviceLabelFields** でさらに設定できます。

デフォルト: **["0e", "ef", "fe", "ff"]**

使用例

```
sources:
  usb:
    deviceClassWhitelist: ["ef", "ff"]
```

`sources.usb.deviceLabelFields`

`sources.usb.deviceLabelFields` は、機能ラベルの名前を作成する USB ID フィールドのセットです。有効なフィールドは **`class`**、**`vendor`**、および **`device`** です。

デフォルト: **`[class, vendor, device]`**

使用例

```
sources:
  pci:
    deviceLabelFields: [class, vendor]
```

上記の設定例では、NFD は **`feature.node.kubernetes.io/usb-<class-id>_<vendor-id>.present=true`** などのラベルを公開します。

`sources.custom`

`sources.custom` は、ユーザー固有のラベルを作成するためにカスタム機能ソースで処理するルールの一覧です。

デフォルト: **`empty`**

使用例

```
source:
  custom:
    - name: "my.custom.feature"
      matchOn:
        - loadedKMod: ["e1000e"]
        - pcid:
            class: ["0200"]
            vendor: ["8086"]
```

3.4. NODEFEATURERULE カスタムリソースについて

`NodeFeatureRule` オブジェクトは、ノードに対するルールベースのカスタムラベル付け用に設計された **`NodeFeatureDiscovery`** カスタムリソースです。一部のユースケースには、デバイス固有ラベルを作成するための、ハードウェアベンダーによるアプリケーション固有のラベル付けまたは配布が含まれます。

`NodeFeatureRule` オブジェクトを使用すると、ベンダー固有またはアプリケーション固有のラベルおよびティントを作成できます。柔軟なルールベースのメカニズムを使用して、ラベルを作成し、オプションでノードの機能に基づきティントを作成します。

3.5. NODEFEATURERULE カスタムリソースの使用

一連のルールが条件に一致する場合にノードにラベルを付ける **`NodeFeatureRule`** オブジェクトを作成します。

手順

1. 次のテキストを含むカスタムリソースを、**nodefeaturerule.yaml** という名前で作成します。

```
apiVersion: nfd.openshift.io/v1
kind: NodeFeatureRule
metadata:
  name: example-rule
spec:
  rules:
    - name: "example rule"
      labels:
        "example-custom-feature": "true"
        # Label is created if all of the rules below match
      matchFeatures:
        # Match if "veth" kernel module is loaded
        - feature: kernel.loadedmodule
          matchExpressions:
            veth: {op: Exists}
        # Match if any PCI device with vendor 8086 exists in the system
        - feature: pci.device
          matchExpressions:
            vendor: {op: In, value: ["8086"]}
```

このカスタムリソースは、**veth** モジュールがロードされ、ベンダーコードが **8086** の PCI デバイスがクラスター内に存在する場合にラベル付けするように指定します。

2. 次のコマンドを実行して、**nodefeaturerule.yaml** ファイルをクラスターに適用します。

```
$ oc apply -f https://raw.githubusercontent.com/kubernetes-sigs/node-feature-discovery/v0.13.6/examples/nodefeaturerule.yaml
```

この例では、**veth** モジュールがロードされており、ベンダーコードが **8086** の PCI デバイスが存在するノードに機能ラベルを適用します。



注記

ラベルの再設定では、最大1分の遅延が発生する可能性があります。

3.6. NFD トポロジーアップデートの使用

Node Feature Discovery (NFD) Topology Updater は、ワーカーノードに割り当てられたリソースを調べるデーモンです。これは、ゾーンごとに新規 Pod に割り当てることができるリソースに対応し、ゾーンを Non-Uniform Memory Access (NUMA) ノードにすることができます。NFD Topology Updater は、情報を nfd-master に伝達します。これにより、クラスター内のすべてのワーカーノードに対応する **NodeResourceTopology** カスタムリソース (CR) が作成されます。NFD Topology Updater のインスタンスが1台、クラスターの各ノードで実行されます。

NFD で Topology Updater ワーカーを有効にするには **Node Feature Discovery Operator の使用** のセクションで説明されているように、**NodeFeatureDiscovery** CR で **topologyupdater** 変数を **true** に設定します。

3.6.1. NodeResourceTopology CR

NFD Topology Updater を使用して実行すると、NFD は、次のようなノードリソースハードウェアトポロジーに対応するカスタムリソースインスタンスを作成します。

```
apiVersion: topology.node.k8s.io/v1alpha1
kind: NodeResourceTopology
metadata:
  name: node1
topologyPolicies: ["SingleNUMANodeContainerLevel"]
zones:
- name: node-0
  type: Node
  resources:
    - name: cpu
      capacity: 20
      allocatable: 16
      available: 10
    - name: vendor/nic1
      capacity: 3
      allocatable: 3
      available: 3
- name: node-1
  type: Node
  resources:
    - name: cpu
      capacity: 30
      allocatable: 30
      available: 15
    - name: vendor/nic2
      capacity: 6
      allocatable: 6
      available: 6
- name: node-2
  type: Node
  resources:
    - name: cpu
      capacity: 30
      allocatable: 30
      available: 15
    - name: vendor/nic1
      capacity: 3
      allocatable: 3
      available: 3
```

3.6.2. NFD Topology Updater コマンドラインフラグ

使用可能なコマンドラインフラグを表示するには、**nfd-topology-updater-help** コマンドを実行します。たとえば、podman コンテナで、次のコマンドを実行します。

```
$ podman run gcr.io/k8s-staging-nfd/node-feature-discovery:master nfd-topology-updater -help
```

-ca-file

-ca-file フラグは、**-cert-file** フラグおよび **-key-file** フラグとともに、NFD トポロジーアップデータで相互 TLS 認証を制御する 3 つのフラグの 1 つです。このフラグは、nfd-master の信頼性検証に使用する TLS ルート証明書を指定します。

デフォルト: empty



重要

-ca-file フラグは、**-cert-file** と **-key-file** フラグと一緒に指定する必要があります。

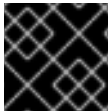
例

```
$ nfd-topology-updater -ca-file=/opt/nfd/ca.crt -cert-file=/opt/nfd/updater.crt -key-file=/opt/nfd/updater.key
```

-cert-file

-cert-file フラグは、**-ca-file** と **-key-file flags** とともに、NFD トポロジーアップデータで相互 TLS 認証を制御する 3 つのフラグの 1 つです。このフラグは、送信要求の認証時に提示する TLS 証明書を指定します。

デフォルト: empty



重要

-cert-file フラグは、**-ca-file** と **-key-file** フラグと一緒に指定する必要があります。

例

```
$ nfd-topology-updater -cert-file=/opt/nfd/updater.crt -key-file=/opt/nfd/updater.key -ca-file=/opt/nfd/ca.crt
```

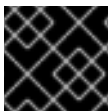
-h, -help

使用法を出力して終了します。

-key-file

-key-file フラグは、**-ca-file** と **-cert-file** フラグとともに、NFD Topology Updater で相互 TLS 認証を制御する 3 つのフラグの 1 つです。このフラグは、指定の証明書ファイルまたは **-cert-file** に対応する秘密鍵 (送信要求の認証に使用) を指定します。

デフォルト: empty



重要

-key-file フラグは、**-ca-file** と **-cert-file** フラグと一緒に指定する必要があります。

例

```
$ nfd-topology-updater -key-file=/opt/nfd/updater.key -cert-file=/opt/nfd/updater.crt -ca-file=/opt/nfd/ca.crt
```

-kubelet-config-file

-kubelet-config-file は、Kubelet の設定ファイルへのパスを指定します。

デフォルト: `/host-var/lib/kubelet/config.yaml`

例

```
$ nfd-topology-updater -kubelet-config-file=/var/lib/kubelet/config.yaml
```

-no-publish

-no-publish フラグは、nfd-master とのすべての通信を無効にし、nfd-topology-updater のドライランフラグにします。NFD Topology Updater は、リソースハードウェアトポロジー検出を正常に実行しますが、CR 要求は nfd-master に送信されません。

デフォルト: **false**

例

```
$ nfd-topology-updater -no-publish
```

3.6.2.1. -oneshot

-oneshot フラグを使用すると、リソースハードウェアトポロジーの検出が1回行われた後も、NFD Topology Updater が終了します。

デフォルト: **false**

例

```
$ nfd-topology-updater -oneshot -no-publish
```

-podresources-socket

-podresources-socket フラグは、kubelet が gRPC サービスをエクスポートして使用中の CPU とデバイスを検出できるようにし、それらのメタデータを提供する Unix ソケットへのパスを指定します。

デフォルト: **/host-var/liblib/kubelet/pod-resources/kubelet.sock**

例

```
$ nfd-topology-updater -podresources-socket=/var/lib/kubelet/pod-resources/kubelet.sock
```

-server

-server フラグは、接続する nfd-master エンドポイントのアドレスを指定します。

デフォルト: **localhost:8080**

例

```
$ nfd-topology-updater -server=nfd-master.nfd.svc.cluster.local:443
```

-server-name-override

-server-name-override フラグは、nfd-master TLS 証明書から必要とされるコモンネーム (CN) を指定します。このフラグは、主に開発とデバッグを目的としています。

デフォルト: **empty**

例

```
$ nfd-topology-updater -server-name-override=localhost
```

-sleep-interval

-sleep-interval フラグは、リソースハードウェアトポロジーの再検査とカスタムリソースの更新の間隔を指定します。正でない値は、スリープ間隔が無限であることを意味し、再検出は行われません。

デフォルト: **60s**。

例

```
$ nfd-topology-updater -sleep-interval=1h
```

-version

バージョンを出力して終了します。

-watch-namespace

-watch-namespace フラグは namespace を指定して、指定された namespace で実行されている Pod に対してのみリソースハードウェアトポロジーの検査が行われるようにします。指定された namespace で実行されていない Pod は、リソースアカウンティングでは考慮されません。これは、テストとデバッグの目的で特に役立ちます。* 値は、全 namespace に含まれるすべての Pod がアカウンティングプロセス中に考慮されることを意味します。

デフォルト: *

例

```
$ nfd-topology-updater -watch-namespace=rte
```

第4章 KERNEL MODULE MANAGEMENT OPERATOR

Kernel Module Management (KMM) Operator と、それを使用して out-of-tree のカーネルモジュールとデバイスプラグインを OpenShift Container Platform クラスターにデプロイする方法を説明します。

4.1. KERNEL MODULE MANAGEMENT OPERATOR について

Kernel Module Management (KMM) Operator は、OpenShift Container Platform クラスター上の out-of-tree のカーネルモジュールとデバイスプラグインを管理、ビルド、署名、およびデプロイします。

KMM は、ツリー外のカーネルモジュールとそれに関連するデバイスプラグインを記述する新しい **Module** CRD を追加します。モジュール リソースを使用して、モジュールをロードする方法を設定し、カーネルバージョンの **ModuleLoader** イメージを定義し、特定のカーネルバージョンのモジュールをビルドして署名するための指示を含めることができます。

KMM は、任意のカーネルモジュールに対して一度に複数のカーネルバージョンに対応できるように設計されているため、ノードのシームレスなアップグレードとアプリケーションのダウンタイムの削減が可能になります。

4.2. KERNEL MODULE MANAGEMENT OPERATOR のインストール

クラスター管理者は、OpenShift CLI または Web コンソールを使用して Kernel Module Management (KMM) Operator をインストールできます。

KMM Operator は、OpenShift Container Platform 4.12 以降でサポートされています。バージョン 4.11 に KMM をインストールする場合、特に追加手順は必要ありません。KMM をバージョン 4.10 以前にインストールする方法の詳細は、「以前のバージョンの OpenShift Container Platform への Kernel Module Management Operator のインストール」セクションを参照してください。

4.2.1. Web コンソールを使用した Kernel Module Management Operator のインストール

クラスター管理者は、OpenShift Container Platform Web コンソールを使用して Kernel Module Management (KMM) Operator をインストールできます。

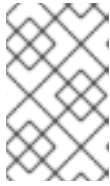
手順

1. OpenShift Container Platform Web コンソールにログインします。
2. Kernel Module Management Operator をインストールします。
 - a. OpenShift Container Platform Web コンソールで、**Operators** → **OperatorHub** をクリックします。
 - b. 使用可能な Operator のリストから **Kernel Module Management Operator** を選択し、**Install** をクリックします。
 - c. **Installed Namespace** リストから、**openshift-kmm** namespace を選択します。
 - d. **Install** をクリックします。

検証

KMM Operator が正常にインストールされたことを確認するには、以下を実行します。

1. **Operators** → **Installed Operators** ページに移動します。
2. **Kernel Module Management Operator** が **openshift-kmm** プロジェクトにリストされ、**Status** が **InstallSucceeded** であることを確認します。



注記

インストール時に、Operator は **Failed** ステータスを表示する可能性があります。インストールが後に **InstallSucceeded** メッセージを出して正常に実行される場合は、**Failed** メッセージを無視できます。

トラブルシューティング

1. Operator のインストールに関する問題をトラブルシューティングするには、以下を実行します。
 - a. **Operators** → **Installed Operators** ページに移動し、**Operator Subscriptions** および **Install Plans** タブで **Status** にエラーがあるかどうかを検査します。
 - b. **Workloads** → **Pods** ページに移動し、**openshift-kmm** プロジェクトで Pod のログを確認します。

4.2.2. CLI を使用した Kernel Module Management Operator のインストール

クラスター管理者は、OpenShift CLI を使用して Kernel Module Management (KMM) Operator をインストールできます。

前提条件

- OpenShift Container Platform クラスターが実行中である。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- **cluster-admin** 権限があるユーザーとして OpenShift CLI にログインしている。

手順

1. KMM を **openshift-kmm** namespace にインストールします。
 - a. 次の **Namespace** CR を作成し、YAML ファイル (**kmm-namespace.yaml** など) を保存します。

```
apiVersion: v1
kind: Namespace
metadata:
  name: openshift-kmm
```

- b. 次の **OperatorGroup** CR を作成し、YAML ファイル (**kmm-op-group.yaml** など) を保存します。

```
apiVersion: operators.coreos.com/v1
kind: OperatorGroup
metadata:
  name: kernel-module-management
  namespace: openshift-kmm
```

- c. 次の **Subscription** CR を作成し、YAML ファイル (**kmm-sub.yaml** など) を保存します。

```
apiVersion: operators.coreos.com/v1alpha1
kind: Subscription
metadata:
  name: kernel-module-management
  namespace: openshift-kmm
spec:
  channel: release-1.0
  installPlanApproval: Automatic
  name: kernel-module-management
  source: redhat-operators
  sourceNamespace: openshift-marketplace
  startingCSV: kernel-module-management.v1.0.0
```

- d. 以下のコマンドを実行して Subscription オブジェクトを作成します。

```
$ oc create -f kmm-sub.yaml
```

検証

- Operator のデプロイメントが正常に行われたことを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
$ oc get -n openshift-kmm deployments.apps kmm-operator-controller
```

出力例

NAME	READY	UP-TO-DATE	AVAILABLE	AGE
kmm-operator-controller	1/1	1	1	97s

Operator は利用可能です。

4.2.3. 以前のバージョンの OpenShift Container Platform への Kernel Module Management Operator のインストール

KMM Operator は、OpenShift Container Platform 4.12 以降でサポートされています。バージョン 4.10 以前では、新しい **SecurityContextConstraint** オブジェクトを作成し、それを Operator の **ServiceAccount** にバインドする必要があります。クラスター管理者は、OpenShift CLI を使用して Kernel Module Management (KMM) Operator をインストールできます。

前提条件

- OpenShift Container Platform クラスターが実行中である。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin** 権限があるユーザーとして OpenShift CLI にログインしている。

手順

- KMM を **openshift-kmm** namespace にインストールします。

- a. 次の **Namespace** CR を作成し、YAML ファイル (**kmm-namespace.yaml** ファイルなど) を保存します。

```
apiVersion: v1
kind: Namespace
metadata:
  name: openshift-kmm
```

- b. 次の **SecurityContextConstraint** オブジェクトを作成し、YAML ファイル (**kmm-security-constraint.yaml** など) を保存します。

```
allowHostDirVolumePlugin: false
allowHostIPC: false
allowHostNetwork: false
allowHostPID: false
allowHostPorts: false
allowPrivilegeEscalation: false
allowPrivilegedContainer: false
allowedCapabilities:
  - NET_BIND_SERVICE
apiVersion: security.openshift.io/v1
defaultAddCapabilities: null
fsGroup:
  type: MustRunAs
groups: []
kind: SecurityContextConstraints
metadata:
  name: restricted-v2
priority: null
readOnlyRootFilesystem: false
requiredDropCapabilities:
  - ALL
runAsUser:
  type: MustRunAsRange
seLinuxContext:
  type: MustRunAs
seccompProfiles:
  - runtime/default
supplementalGroups:
  type: RunAsAny
users: []
volumes:
  - configMap
  - downwardAPI
  - emptyDir
  - persistentVolumeClaim
  - projected
  - secret
```

- c. 次のコマンドを実行して、**SecurityContextConstraint** オブジェクトを Operator の **ServiceAccount** にバインドします。

```
$ oc apply -f kmm-security-constraint.yaml
```

```
$ oc adm policy add-scc-to-user kmm-security-constraint -z kmm-operator-controller -n
openshift-kmm
```

- d. 次の **OperatorGroup** CR を作成し、YAML ファイル (**kmm-op-group.yaml** など) を保存します。

```
apiVersion: operators.coreos.com/v1
kind: OperatorGroup
metadata:
  name: kernel-module-management
  namespace: openshift-kmm
```

- e. 次の **Subscription** CR を作成し、YAML ファイル (**kmm-sub.yaml** など) を保存します。

```
apiVersion: operators.coreos.com/v1alpha1
kind: Subscription
metadata:
  name: kernel-module-management
  namespace: openshift-kmm
spec:
  channel: release-1.0
  installPlanApproval: Automatic
  name: kernel-module-management
  source: redhat-operators
  sourceNamespace: openshift-marketplace
  startingCSV: kernel-module-management.v1.0.0
```

- f. 以下のコマンドを実行して Subscription オブジェクトを作成します。

```
$ oc create -f kmm-sub.yaml
```

検証

- Operator のデプロイメントが正常に行われたことを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
$ oc get -n openshift-kmm deployments.apps kmm-operator-controller
```

出力例

NAME	READY	UP-TO-DATE	AVAILABLE	AGE
kmm-operator-controller	1/1	1	1	97s

Operator は利用可能です。

4.3. KERNEL MODULE MANAGEMENT OPERATOR の設定

ほとんどの場合、Kernel Module Management (KMM) Operator のデフォルト設定を変更する必要はありません。ただし、次の手順を使用して、環境に合わせて Operator 設定を変更できます。

Operator 設定は、Operator namespace の **kmm-operator-manager-config ConfigMap** に設定されています。

手順

1. 設定を変更するには、次のコマンドを入力して **ConfigMap** データを編集します。

```
$ oc edit configmap -n "$namespace" kmm-operator-manager-config
```

出力例

```
healthProbeBindAddress: :8081
job:
  gcDelay: 1h
leaderElection:
  enabled: true
  resourceID: kmm.sigs.x-k8s.io
webhook:
  disableHTTP2: true # CVE-2023-44487
  port: 9443
metrics:
  enableAuthnAuthz: true
  disableHTTP2: true # CVE-2023-44487
  bindAddress: 0.0.0.0:8443
  secureServing: true
worker:
  runAsUser: 0
  seLinuxType: spc_t
  setFirmwareClassPath: /var/lib/firmware
```

表4.1 Operator 設定パラメーター

パラメーター	説明
healthProbeBindAddress	Operator が kubelet ヘルスプローブを監視するアドレスを定義します。推奨値は :8081 です。
job.gcDelay	成功したビルド Pod を削除するまでの保持期間を定義します。この設定に推奨値はありません。この設定の有効な値は、 ParseDuration を参照してください。
leaderElection.enabled	leader election を使用して KMM Operator のレプリカが常に1つだけ実行されるようにするか決定します。詳細は、 リース を参照してください。推奨値は true です。
leaderElection.resourceID	leader election がリーダーロックを保持するために使用するリソースの名前を決定します。推奨値は kmm.sigs.x-k8s.io です。
webhook.disableHTTP2	true の場合、 cve-2023-44487 の緩和策として、webhook サーバーの HTTP/2 が無効になります。推奨値は true です。
webhook.port	Operator が webhook リクエストを監視するポートを定義します。推奨値は 9443 です。

パラメーター	説明
metrics.enableAuthnAuthz	メトリクスの認証に TokenReviews を使用し、認可に kube-apiserver で SubjectAccessReviews を使用するかどうか決定します。 認証と認可のために、コントローラーには次のルールを持つ ClusterRole が必要です。 • apiGroups: authentication.k8s.io, resources: tokenreviews, verbs: create • apiGroups: authorization.k8s.io, resources: subjectaccessreviews, verbs: create たとえば、Prometheus を使用してメトリクスをスクレイピングするには、クライアントに次のルールを持つ ClusterRole が必要です。 • nonResourceURLs: "/metrics", verbs: get 推奨値は true です。
metrics.disableHTTP2	true の場合、CVE-2023-44487 の緩和策として、メトリクスサーバーの HTTP/2 が無効になります。推奨値は true です。
metrics.bindAddress	メトリクスサーバーのバインドアドレスを決定します。指定しない場合、デフォルトは :8080 です。メトリクスサーバーを無効にするには、0 に設定します。推奨値は 0.0.0.0:8443 です。
metrics.secureServing	メトリクスが HTTP ではなく HTTPS 経由で提供されるかどうかを決定します。推奨値は true です。
worker.runAsUser	ワーカーコンテナのセキュリティコンテキストの runAsUser フィールド値を決定します。詳細は、SecurityContext を参照してください。推奨値は 9443 です。
worker.seLinuxType	ワーカーコンテナのセキュリティコンテキストの seLinuxOptions.type フィールド値を決定します。詳細は、SecurityContext を参照してください。推奨値は spc_t です。
worker.setFirmwareClassPath	カーネルのファームウェア検索パスをノード上の /sys/module/firmware_class/parameters/path ファイルに設定します。ワーカーアプリケーションを通じて値を設定する必要がある場合、推奨値は /var/lib/firmware です。それ以外の場合は設定しません。

- 設定を変更したら、次のコマンドでコントローラーを再起動します。

```
$ oc delete pod -n "<namespace>" -l app.kubernetes.io/component=kmm
```



注記

<namespace> の値は、元のインストール方法によって異なります。

関連情報

- 詳細は、[Kernel Module Management Operator のインストール](#) を参照してください。

4.3.1. カーネルモジュールのアンロード

新しいバージョンに移行する場合、またはカーネルモジュールがノードに望ましくない作用をもたらす場合は、カーネルモジュールをアンロードする必要があります。

手順

- KMM でロードされたモジュールをノードからアンロードするには、対応する **Module** リソースを削除します。次に、KMM が必要に応じてワーカー Pod を作成し、**modprobe -r** を実行してノードからカーネルモジュールをアンロードします。



警告

ワーカー Pod をアンロードする場合、KMM はカーネルモジュールをロードするときに使用するすべてのリソースを必要とします。これには、**Module** で参照される **ServiceAccount** と、特権付き KMM ワーカー Pod の実行を許可するために定義された RBAC が含まれます。また、**.spec.imageRepoSecret** で参照されるプルシークレットも含まれます。

KMM がノードからカーネルモジュールをアンロードできない状況を回避するには、**Module** リソースが **Terminating** などの任意の状態でクラスター内に存在している間は、それらのリソースが削除されないようにしてください。KMM には、少なくとも1つの **Module** リソースを含む namespaces の削除を拒否する検証アドミッション Webhook が含まれています。

4.3.2. カーネルファームウェア検索パスの設定

[ファームウェアの検索パス](#) で説明されているとおり、Linux カーネルは **firmware_class.path** パラメーターをファームウェアの検索パスとして受け入れます。

KMM ワーカー Pod は、kmods のロードを試みる前に sysfs に書き込むことで、ノードにこの値を設定できます。

手順

- ファームウェア検索パスを定義するには、Operator 設定で **worker.setFirmwareClassPath** を **/var/lib/firmware** に設定します。

関連情報

- **worker.setFirmwareClassPath** パスの詳細は、[Kernel Module Management Operator の設定](#) を参照してください。

4.4. KERNEL MODULE MANAGEMENT OPERATOR のアンインストール

KMM Operator のインストール方法に応じて、次のいずれかの手順を使用して、Kernel Module Management (KMM) Operator をアンインストールします。

4.4.1. Red Hat カタログインストールのアンインストール

KMM が Red Hat カタログからインストールされた場合は、この手順を使用します。

手順

KMM Operator をアンインストールするには、次の方法を使用します。

- OpenShift コンソールの **Operators** → **Installed Operators** を使用して、Operator を見つけてアンインストールします。



注記

あるいは、KMM namespace の **Subscription** リソースを削除することもできます。

4.4.2. CLI インストールのアンインストール

KMM Operator が OpenShift CLI を使用してインストールされた場合は、このコマンドを使用します。

手順

- 次のコマンドを実行して、KMM Operator をアンインストールします。

```
$ oc delete -k https://github.com/rh-ecosystem-edge/kernel-module-management/config/default
```



注記

このコマンドを使用すると、**Module** CRD とクラスター内のすべての **Module** インスタンスが削除されます。

4.5. カーネルモジュールのデプロイ

Kernel Module Management (KMM) は、クラスター内の **Node** および **Module** リソースを監視して、カーネルモジュールをノードにロードするか、ノードからアンロードするかを決定します。

モジュールのロード対象となるには、ノードに次のものが含まれている必要があります。

- モジュールの **.spec.selector** フィールドと一致するラベル。
- モジュールの **.spec.moduleLoader.container.kernelMappings** フィールド内の項目の1つと一致するカーネルバージョン。
- モジュールで順序付きアップグレード (**ordered_upgrade.md**) が設定されている場合、その **.spec.moduleLoader.container.version** フィールドと一致するラベル。

KMM は、**Module** リソースで設定されている目的の状態に合わせてノードを調整するときに、必要なアクションを実行するためにターゲットノード上にワーカー Pod を作成します。KMM Operator は Pod の結果を監視し、情報を記録します。Operator はこの情報を使用して、モジュールが正常にロードされたときに **Node** オブジェクトにラベルを付け、デバイスプラグインを実行します (設定されている場合)。

ワーカー Pod は、次のタスクを実行する KMM **worker** バイナリーを実行します。

- **Module** リソースで設定された kmod イメージをプルします。kmod イメージは、**.ko** ファイルを含む標準の OCI イメージです。
- Pod のファイルシステム内のイメージを抽出します。
- 指定された引数を使用して **modprobe** を実行し、必要なアクションを実行します。

4.5.1. Module カスタムリソース定義

Module カスタムリソース定義 (CRD) は、kmod イメージによってクラスター内のすべてまたは一部のノードにロードできるカーネルモジュールを表します。**Module** カスタムリソース (CR) は、互換性のある1つ以上のカーネルバージョンとノードセクターを指定します。

Module リソースの互換性のあるバージョンは、**.spec.moduleLoader.container.kernelMappings** の下にリストされています。カーネルマッピングは、**literal** バージョンと一致するか、**regex** を使用してそれらの多くを同時に一致させることができます。

Module リソースの調整ループでは、次の手順が実行されます。

1. **.spec.selector** に一致するすべてのノードをリスト表示します。
2. それらのノードで実行されているすべてのカーネルバージョンのセットを構築します。
3. 各カーネルバージョンで以下を実行します。
 - a. **.spec.moduleLoader.container.kernelMappings** を調べて、適切なコンテナイメージ名を見つけます。カーネルマッピングに **build** または **sign** が定義されていて、コンテナイメージがまだ存在しない場合は、必要に応じてビルド、署名 Pod、またはその両方を実行します。
 - b. 前のステップで特定したコンテナイメージをプルし、**modprobe** を実行するワーカー Pod を作成します。
 - c. **.spec.devicePlugin** が定義されている場合は、**.spec.devicePlugin.container** で指定された設定を使用して、デバイスプラグインデーモンセットを作成します。
4. 以下に対して **garbage-collect** を実行します。
 - a. どのノードも対象としていない、廃止されたデバイスプラグインの **DaemonSets**。
 - b. 成功したビルド Pod。
 - c. 成功した署名 Pod。

4.5.2. カーネルモジュール間のソフト依存関係を設定する

一部の設定では、複数のカーネルモジュールがシンボルを通じて相互に直接依存していない場合でも、それらのモジュールを特定の順序でロードしなければ適切に動作しません。これはソフト依存関係と呼ばれています。**depmod** は通常、これらの依存関係を認識せず、生成するファイルには表示されません。たとえば、**mod_a** に **mod_b** に対するソフト依存関係がある場合、**modprobe mod_a** は **mod_b** をロードしません。

このような状況は、**modulesLoadingOrder** フィールドを使用してモジュールカスタムリソース定義 (CRD) でソフト依存関係を宣言することで解決できます。

```
# ...
spec:
  moduleLoader:
    container:
      modprobe:
        moduleName: mod_a
        dirName: /opt
        firmwarePath: /firmware
        parameters:
          - param=1
        modulesLoadingOrder:
          - mod_a
          - mod_b
```

上記の設定では、ワーカー Pod が、kmod イメージから **mod_a** をロードする前に、まずツリー内の **mod_b** をアンロードしようとしています。ワーカー Pod が終了し、**mod_a** がアンロードされると、**mod_b** は再度ロードされません。



注記

リストの最初の値は最後にロードされ、**moduleName** と等しくなければなりません。

4.6. セキュリティーおよびパーミッション



重要

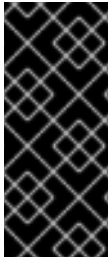
カーネルモジュールのロードは、非常に機密性の高い操作です。それらがロードされると、カーネルモジュールには、ノード上であらゆる種類の操作を実行するためのすべての可能な権限が付与されます。

4.6.1. ServiceAccounts および SecurityContextConstraints

Kernel Module Management (KMM) は、カーネルモジュールをノードにロードするための特権ワークロードを作成します。そのワークロードには、**privileged SecurityContextConstraint (SCC)** リソースの使用を許可された **ServiceAccounts** が必要です。

そのワークロードの承認モデルは、**Module** リソースの namespace とその仕様によって異なります。

- **.spec.moduleLoader.serviceAccountName** または **.spec.devicePlugin.serviceAccountName** フィールドが設定されている場合は常に使用されます。
- これらのフィールドが設定されていない場合:
 - **Module** リソースが Operator の namespace (デフォルトでは **openshift-kmm**) に作成された場合、KMM はデフォルトの強力な **ServiceAccounts** を使用してワーカーおよびデバイスプラグイン Pod を実行します。
 - **Module** リソースがその他の namespace に作成された場合、KMM は namespace の **default ServiceAccount** を使用して Pod を実行します。**Module** リソースは、**privileged SCC** の使用を手動で有効にしない限り、特権ワークロードを実行できません。



重要

openshift-kmm は信頼できる namespace です。

RBAC 権限を設定するときは、ユーザーまたは **ServiceAccount** が **openshift-kmm** namespace で **Module** リソースを作成すると、KMM がクラスター内のすべてのノードで特権ワークロードを自動的に実行することに注意してください。

ServiceAccount が **privileged SCC** を使用してワーカーまたはデバイスプラグイン Pod を実行できるようにするには、次の例のように **oc adm policy** コマンドを使用します。

```
$ oc adm policy add-scc-to-user privileged -z "${serviceAccountName}" [ -n "${namespace}" ]
```

4.6.2. Pod のセキュリティ基準

OpenShift は、使用中のセキュリティコンテキストに基づいて namespace Pod セキュリティレベルを自動的に設定する同期メカニズムを実行します。アクションは不要です。

関連情報

- Pod セキュリティアドミSSIONSの理解と管理

4.7. ツリー内モジュールをツリー外モジュールに置き換える

Kernel Module Management (KMM) を使用して、オンデマンドでカーネルにロードまたはアンロードできるカーネルモジュールをビルドできます。これらのモジュールは、システムを再起動することなくカーネルの機能を拡張します。モジュールは、ビルトインまたは動的にロードされるように設定できます。

動的にロードされるモジュールには、ツリー内モジュールとツリー外 (OOT) モジュールが含まれます。ツリー内モジュールは、すでにカーネルの一部として Linux カーネルツリーの内部にあります。ツリー外モジュールは、Linux カーネルツリーの外側にあります。これらは通常、ツリー内で出荷されるカーネルモジュールの新しいバージョンのテストや、非互換性に対処するなど、開発およびテストの目的で作成されます。

KMM によってロードされているモジュールの一部は、ノードにすでにロードされているツリー内モジュールを置き換えることができます。モジュールをロードする前にツリー内モジュールをアンロードするには、**.spec.moduleLoader.container.inTreeModulesToRemove** フィールドの値をアンロードするモジュールに設定します。以下の例は、すべてのカーネルマッピングのモジュール置換を示しています。

```
# ...
spec:
  moduleLoader:
    container:
      modprobe:
        moduleName: mod_a

    inTreeModulesToRemove: [mod_a, mod_b]
```

この例では、**moduleLoader** Pod は、**moduleLoader** イメージから **mod_a** をロードする前に、**inTreeModulesToRemove** を使用してツリー内の **mod_a** および **mod_b** をアンロードします。**moduleLoader`pod is terminated and `mod_a** がアンロードされても、**mod_b** は再ロードされま

せん。

以下は、特定のカーネルマッピングのモジュール置換の例です。

```
# ...
spec:
  moduleLoader:
    container:
      kernelMappings:
        - literal: 6.0.15-300.fc37.x86_64
          containerImage: "some.registry/org/my-kmod:${KERNEL_FULL_VERSION}"
          inTreeModulesToRemove: [<module_name>, <module_name>]
```

関連情報

- [Building a linux kernel module](#)

4.7.1. Module CR の例

以下は、アノテーション付きの **Module** の例です。

```
apiVersion: kmm.sigs.x-k8s.io/v1beta1
kind: Module
metadata:
  name: <my_kmod>
spec:
  moduleLoader:
    container:
      modprobe:
        moduleName: <my_kmod> ❶
        dirName: /opt ❷
        firmwarePath: /firmware ❸
        parameters: ❹
          - param=1
        kernelMappings: ❺
          - literal: 6.0.15-300.fc37.x86_64
            containerImage: some.registry/org/my-kmod:6.0.15-300.fc37.x86_64
          - regexp: '^.+\.fc37\.x86_64$' ❻
            containerImage: "some.other.registry/org/<my_kmod>:${KERNEL_FULL_VERSION}"
          - regexp: '^.+$. $' ❼
            containerImage: "some.registry/org/<my_kmod>:${KERNEL_FULL_VERSION}"
        build:
          buildArgs: ❽
            - name: ARG_NAME
              value: <some_value>
          secrets:
            - name: <some_kubernetes_secret> ❾
          baseImageRegistryTLS: ❿
            insecure: false
            insecureSkipTLSVerify: false ⓫
          dockerfileConfigMap: ⓫
            name: <my_kmod_dockerfile>
          sign:
```

```

certSecret:
  name: <cert_secret> 13
keySecret:
  name: <key_secret> 14
filesToSign:
  - /opt/lib/modules/${KERNEL_FULL_VERSION}/<my_kmod>.ko
registryTLS: 15
  insecure: false 16
  insecureSkipTLSVerify: false
serviceAccountName: <sa_module_loader> 17
devicePlugin: 18
  container:
    image: some.registry/org/device-plugin:latest 19
    env:
      - name: MY_DEVICE_PLUGIN_ENV_VAR
        value: SOME_VALUE
    volumeMounts: 20
      - mountPath: /some/mountPath
        name: <device_plugin_volume>
    volumes: 21
      - name: <device_plugin_volume>
      configMap:
        name: <some_configmap>
    serviceAccountName: <sa_device_plugin> 22
  imageRepoSecret: 23
    name: <secret_name>
  selector:
    node-role.kubernetes.io/worker: ""

```

- 1 1 1 必須。
- 2 オプション。
- 3 オプション: **/firmware/*** をノード上の **/var/lib/firmware/** にコピーします。
- 4 オプション。
- 5 少なくとも1つのカーネル項目が必要です。
- 6 正規表現に一致するカーネルを実行しているノードごとに、KMM は **\${KERNEL_FULL_VERSION}** をカーネルバージョンに置き換えて、**containerImage** で指定されたイメージを実行する **DaemonSet** リソースを作成します。
- 7 その他のカーネルの場合は、**my-kmod** ConfigMap の Dockerfile を使用してイメージをビルドします。
- 8 任意。
- 9 オプション: **some-kubernetes-secret** の値は、**/run/secrets/some-kubernetes-secret** のビルド環境から取得できます。
- 10 このフィールドは効果がありません。kmod イメージをビルドするか、kmod イメージ内で kmod に署名する場合は、信頼できない認証局 (CA) によって署名された証明書を提供するレジストリーから、ベースイメージを時折プルすることを推奨します。KMM がその CA を信頼するには、クラスターの CA バンドルを置き換えて新しい CA も信頼する必要があります。

クラスターの CA バンドルを置き換える方法は、関連情報を参照してください。

- 11 オプション: このパラメーターは使用しないでください。true に設定すると、プレーン HTTP を使用して Dockerfile **FROM** 命令でイメージをプルするときに、ビルドは TLS サーバー証明書の検証をスキップします。
- 12 必須。
- 13 必須: 鍵 'cert' を持つ公開セキュアブート鍵を保持するシークレット。
- 14 必須: 'key' という鍵が含まれるセキュアブート秘密鍵を保持するシークレット。
- 15 オプション: このパラメーターは使用しないでください。true に設定すると、KMM はプレーン HTTP を使用してコンテナイメージがすでに存在するかどうかを確認できます。
- 16 オプション: このパラメーターは使用しないでください。true に設定すると、コンテナイメージがすでに存在するかどうかを確認するときに、KMM は TLS サーバー証明書の検証をスキップします。
- 17 任意。
- 18 任意。
- 19 必須: デバイスプラグインセクションが存在する場合。
- 20 任意。
- 21 任意。
- 22 任意。
- 23 オプション: モジュールローダーとデバイスプラグインイメージをプルするために使用されます。

関連情報

- [CA バンドル証明書の置き換え](#)

4.8. インツリー依存関係のシンボリックリンク

一部のカーネルモジュールは、ノードのオペレーティングシステムに同梱されている他のカーネルモジュールに依存します。これらの依存関係が kmod イメージにコピーされるのを回避するために、Kernel Module Management (KMM) は、ビルドとワーカー Pod の両方のファイルシステムに **/usr/lib/modules** をマウントします。

/opt/usr/lib/modules/<kernel_version>/<symlink_name> から **/usr/lib/modules/<kernel_version>** へのシンボリックリンクを作成することにより、**depmod** はビルドノードのファイルシステム上のインツリー **kmods** を使用して依存関係を解決できます。

実行時に、ワーカー Pod は **<symlink_name>** シンボリックリンクを含むイメージ全体を抽出します。このシンボリックリンクは、ノードのファイルシステムからマウントされるワーカー Pod 内の **/usr/lib/modules/<kernel_version>** を指します。**modprobe** はそのリンクをたどり、必要に応じてインツリーの依存関係をロードできます。

次の例では、**host** は **/opt/usr/lib/modules/<kernel_version>** の下のシンボリックリンク名です。

■

```
ARG DTK_AUTO
```

```
FROM ${DTK_AUTO} as builder
```

```
#
```

```
# Build steps
```

```
#
```

```
FROM ubi9/ubi
```

```
ARG KERNEL_FULL_VERSION
```

```
RUN dnf update && dnf install -y kmod
```

```
COPY --from=builder /usr/src/kernel-module-management/ci/kmm-kmod/kmm_ci_a.ko  
/opt/lib/modules/${KERNEL_FULL_VERSION}/
```

```
COPY --from=builder /usr/src/kernel-module-management/ci/kmm-kmod/kmm_ci_b.ko  
/opt/lib/modules/${KERNEL_FULL_VERSION}/
```

```
# Create the symbolic link
```

```
RUN ln -s /lib/modules/${KERNEL_FULL_VERSION}  
/opt/lib/modules/${KERNEL_FULL_VERSION}/host
```

```
RUN depmod -b /opt ${KERNEL_FULL_VERSION}
```



注記

depmod は、kmod イメージビルドを実行するノードに存在するカーネルモジュールに基づいて依存関係ファイルを生成します。

KMM がカーネルモジュールをロードするノードでは、**modprobe** は、ファイルが `/usr/lib/modules/<kernel_version>` の下に存在し、同じファイルシステムレイアウトであることを期待します。ビルドノードとターゲットノードで同じオペレーティングシステムとリリースを共有することを強く推奨します。

4.9. KMOD イメージの作成

Kernel Module Management (KMM) は専用の kmod イメージを使用します。これは **.ko** ファイルを含む標準 OCI イメージです。**.ko** ファイルの場所は、`<prefix>/lib/modules/[kernel-version]/` というパターンに従っている必要があります。

.ko ファイルを扱うときは、次の点に注意してください。

- ほとんどの場合、**<prefix>** は **/opt** と同じになります。これは **Module** CRD のデフォルト値です。
- kernel-version** は空であってはならず、カーネルモジュールのビルドに使用されたカーネルバージョンと同じである必要があります。

4.9.1. depmod の実行

ビルドプロセスの最後に **depmod** を実行して、**modules.dep** ファイルと **.map** ファイルを生成することを推奨します。これは、kmod イメージに複数のカーネルモジュールが含まれており、モジュールの1つが別のモジュールに依存している場合に特に便利です。



注記

kernel-devel パッケージをダウンロードするには、Red Hat Subscription が必要です。

手順

- 次のコマンドを実行して、特定のカーネルバージョンの **modules.dep** および **.map** ファイルを生成します。

```
$ depmod -b /opt ${KERNEL_FULL_VERSION}+`
```

4.9.1.1. Dockerfile の例

OpenShift Container Platform でイメージをビルドする場合は、Driver Tool Kit (DTK) の使用を検討してください。

詳細は、[資格のあるビルドの使用](#) を参照してください。

```
apiVersion: v1
kind: ConfigMap
metadata:
  name: kmm-ci-dockerfile
data:
  dockerfile: |
    ARG DTK_AUTO
    FROM ${DTK_AUTO} as builder
    ARG KERNEL_FULL_VERSION
    WORKDIR /usr/src
    RUN ["git", "clone", "https://github.com/rh-ecosystem-edge/kernel-module-management.git"]
    WORKDIR /usr/src/kernel-module-management/ci/kmm-kmod
    RUN KERNEL_SRC_DIR=/lib/modules/${KERNEL_FULL_VERSION}/build make all
    FROM registry.redhat.io/ubi9/ubi-minimal
    ARG KERNEL_FULL_VERSION
    RUN microdnf install kmod
    COPY --from=builder /usr/src/kernel-module-management/ci/kmm-kmod/kmm_ci_a.ko
    /opt/lib/modules/${KERNEL_FULL_VERSION}/
    COPY --from=builder /usr/src/kernel-module-management/ci/kmm-kmod/kmm_ci_b.ko
    /opt/lib/modules/${KERNEL_FULL_VERSION}/
    RUN depmod -b /opt ${KERNEL_FULL_VERSION}
```

関連情報

- [Driver Toolkit](#)

4.9.2. クラスターでのビルド

KMM はクラスター内に kmod イメージをビルドできます。次のガイドラインに従ってください。

- カーネルマッピングの build セクションを使用して **build** 命令を提供します。
- コンテナイメージの Dockerfile を、**dockerfile** キーの下に **ConfigMap** リソースにコピーします。
- **ConfigMap** が **Module** と同じ namespace にあることを確認します。

KMM は、**containerImage** フィールドで指定されたイメージ名が存在するかどうかを確認します。その場合、ビルドはスキップされます。

それ以外の場合、KMM は **Build** リソースを作成してイメージをビルドします。イメージがビルドされると、KMM はモジュールの調整を **Module** します。以下の例を参照してください。

```
# ...
- regexp: '^.+${'
containerImage: "some.registry/org/<my_kmod>:${KERNEL_FULL_VERSION}"
build:
  buildArgs: ❶
    - name: ARG_NAME
      value: <some_value>
  secrets: ❷
    - name: <some_kubernetes_secret> ❸
  baseImageRegistryTLS:
    insecure: false ❹
    insecureSkipTLSVerify: false ❺
  dockerfileConfigMap: ❻
    name: <my_kmod_dockerfile>
  registryTLS:
    insecure: false ❼
    insecureSkipTLSVerify: false ❽
```

- ❶ 任意。
- ❷ 任意。
- ❸ `/run/secrets/some-kubernetes-secret` としてビルド Pod にマウントされます。
- ❹ オプション: このパラメーターは使用しないでください。**true** に設定すると、ビルドはプレーン HTTP を使用して Dockerfile **FROM** 命令でイメージをプルできます。
- ❺ オプション: このパラメーターは使用しないでください。**true** に設定すると、プレーン HTTP を使用して Dockerfile **FROM** 命令でイメージをプルするときに、ビルドは TLS サーバー証明書の検証をスキップします。
- ❻ 必須。
- ❼ オプション: このパラメーターは使用しないでください。**true** に設定すると、KMM はプレーン HTTP を使用してコンテナイメージがすでに存在するかどうかを確認できます。
- ❽ オプション: このパラメーターは使用しないでください。**true** に設定すると、コンテナイメージがすでに存在するかどうかを確認するときに、KMM は TLS サーバー証明書の検証をスキップします。

Operator 設定で **job.gcDelay** パラメーターが設定されていない限り、成功したビルド Pod にはすぐにガベージコレクションが適用されます。失敗したビルド Pod は常に保存されるため、ビルドを再開するには管理者が手動で削除する必要があります。

関連情報

- [ビルド設定リソース](#)

- [Kernel Module Management \(KMM\) モジュールのプリフライト検証](#)

4.9.3. Driver Toolkit の使用

Driver Toolkit (DTK) は、ビルド kmod ローダーイメージをビルドするための便利なベースイメージです。これには、クラスターで現在実行されている OpenShift バージョンのツールとライブラリーが含まれています。

手順

マルチステージの Dockerfile の最初のステージとして DTK を使用します。

1. カーネルモジュールをビルドします。
2. **.ko** ファイルを **ubi-minimal** などの小さなエンドユーザーイメージにコピーします。
3. クラスター内ビルドで DTK を利用するには、**DTK_AUTO** ビルド引数を使用します。この値は、**Build** リソースの作成時に KMM によって自動的に設定されます。以下の例を参照してください。

```
ARG DTK_AUTO
FROM ${DTK_AUTO} as builder
ARG KERNEL_FULL_VERSION
WORKDIR /usr/src
RUN ["git", "clone", "https://github.com/rh-ecosystem-edge/kernel-module-management.git"]
WORKDIR /usr/src/kernel-module-management/ci/kmm-kmod
RUN KERNEL_SRC_DIR=/lib/modules/${KERNEL_FULL_VERSION}/build make all
FROM ubi9/ubi-minimal
ARG KERNEL_FULL_VERSION
RUN microdnf install kmod
COPY --from=builder /usr/src/kernel-module-management/ci/kmm-kmod/kmm_ci_a.ko
/opt/lib/modules/${KERNEL_FULL_VERSION}/
COPY --from=builder /usr/src/kernel-module-management/ci/kmm-kmod/kmm_ci_b.ko
/opt/lib/modules/${KERNEL_FULL_VERSION}/
RUN depmod -b /opt ${KERNEL_FULL_VERSION}
```

関連情報

- [Driver Toolkit](#)

4.10. KERNEL MODULE MANAGEMENT (KMM) による署名の使用

セキュアブートが有効なシステムでは、すべてのカーネルモジュール (kmods) は、マシン所有者の鍵 (MOK) データベースに登録された公開/秘密鍵のペアで署名する必要があります。ディストリビューションの一部として配布されるドライバーは、ディストリビューションの秘密鍵によってすでに署名されている必要がありますが、ツリー外でビルドされたカーネルモジュールの場合、KMM はカーネルマッピングの **sign** セクションを使用したカーネルモジュールへの署名をサポートします。

セキュアブートの使用の詳細は、[公開鍵と秘密鍵のペアの生成](#) を参照してください。

前提条件

- 正しい (DER) 形式の公開秘密鍵ペア。
- 公開鍵が MOK データベースに登録されている、少なくとも1つのセキュアブート対応ノード。

- ビルド済みのドライバーコンテナイメージ、またはクラスター内でビルドするために必要なソースコードと Dockerfile のいずれか。

4.11. SECUREBOOT の鍵の追加

KMM Kernel Module Management (KMM) を使用してカーネルモジュールに署名するには、証明書と秘密鍵が必要です。これらの作成方法の詳細は、[公開鍵と秘密鍵のペアの生成](#) を参照してください。

公開鍵と秘密鍵のペアを抽出する方法の詳細は、[秘密鍵を使用してカーネルモジュールに署名する](#) を参照してください。手順 1~4 を使用して、キーをファイルに抽出します。

手順

1. 証明書を含む **sb_cert.cer** ファイルと、秘密鍵を含む **sb_cert.priv** ファイルを作成します。

```
$ openssl req -x509 -new -nodes -utf8 -sha256 -days 36500 -batch -config
configuration_file.config -outform DER -out my_signing_key_pub.der -keyout
my_signing_key.priv
```

2. 次のいずれかの方法を使用して、ファイルを追加します。

- ファイルを [シークレット](#) として直接追加します。

```
$ oc create secret generic my-signing-key --from-file=key=<my_signing_key.priv>
```

```
$ oc create secret generic my-signing-key-pub --from-file=cert=
<my_signing_key_pub.der>
```

- base64 エンコーディングでファイルを追加します。

```
$ cat sb_cert.priv | base64 -w 0 > my_signing_key2.base64
```

```
$ cat sb_cert.cer | base64 -w 0 > my_signing_key_pub.base64
```

3. エンコードされたテキストを YAML ファイルに追加します。

```
apiVersion: v1
kind: Secret
metadata:
  name: my-signing-key-pub
  namespace: default 1
type: Opaque
data:
  cert: <base64_encoded_secureboot_public_key>
```

```
apiVersion: v1
kind: Secret
metadata:
  name: my-signing-key
  namespace: default 2
```

```
type: Opaque
data:
  key: <base64_encoded_secureboot_private_key>
```

1 2 namespace - default を有効な namespace に置き換えます。

4. YAML ファイルを適用します。

```
$ oc apply -f <yaml_filename>
```

4.11.1. キーの確認

キーを追加したら、キーが正しく設定されていることを確認する必要があります。

手順

1. 公開鍵シークレットが正しく設定されていることを確認します。

```
$ oc get secret -o yaml <certificate secret name> | awk '/cert/{print $2; exit}' | base64 -d |
openssl x509 -inform der -text
```

これにより、シリアル番号、発行者、サブジェクトなどを含む証明書が表示されます。

2. 秘密鍵シークレットが正しく設定されていることを確認します。

```
$ oc get secret -o yaml <private key secret name> | awk '/key/{print $2; exit}' | base64 -d
```

これにより、-----BEGIN PRIVATE KEY----- および -----END PRIVATE KEY----- 行で囲まれたキーが表示されます。

4.12. ビルド済みイメージ内の KMODS への署名

ハードウェアベンダーによって配布されたイメージや別の場所でビルドされたイメージなど、ビルド済みのイメージがある場合は、この手順を使用します。

次の YAML ファイルは、公開鍵と秘密鍵のペアを必要なキー名 (秘密鍵の場合は **key**、公開鍵の場合は **cert**) を持つシークレットとして追加します。次に、クラスターは **unsignedImage** イメージをプルダウンし、これを開いて **filesToSign** に一覧表示されているカーネルモジュールに署名し、それらを再び追加し、作成されたイメージを **containerImage** としてプッシュします。

次に、KMM は、セレクターに一致するすべてのノードに署名された kmod をロードします。kmods は、MOK データベースに公開鍵を持つすべてのノード、およびセキュアブートが有効になっていないすべてのノード (署名を無視するノード) に正常にロードされます。

前提条件

- **keySecret** および **certSecret** シークレットが、残りのリソースと同じ namespace に作成されている。

手順

- YAML ファイルを適用します。

-

```

---
apiVersion: kmm.sigs.x-k8s.io/v1beta1
kind: Module
metadata:
  name: example-module
spec:
  moduleLoader:
    serviceAccountName: default
  container:
    modprobe: ❶
    moduleName: '<module_name>'
    kernelMappings:
      # the kmods will be deployed on all nodes in the cluster with a kernel that matches the
      # regexp
      - regexp: '^.*\x86_64$'
        # the container to produce containing the signed kmods
        containerImage: <image_name> ❷
        sign:
          # the image containing the unsigned kmods (we need this because we are not
          # building the kmods within the cluster)
          unsignedImage: <image_name> ❸
          keySecret: # a secret holding the private secureboot key with the key 'key'
            name: <private_key_secret_name>
          certSecret: # a secret holding the public secureboot key with the key 'cert'
            name: <certificate_secret_name>
          filesToSign: # full path within the unsignedImage container to the kmod(s) to sign
            - /opt/lib/modules/4.18.0-348.2.1.el8_5.x86_64/kmm_ci_a.ko
    imageRepoSecret:
      # the name of a secret containing credentials to pull unsignedImage and push
      # containerImage to the registry
      name: repo-pull-secret
    selector:
      kubernetes.io/arch: amd64

```

- ❶ ロードする kmod の名前。
- ❷ コンテナイメージの名前。たとえば、**quay.io/myuser/my-driver:<kernelversion>** です。
- ❸ 署名のないイメージの名前。たとえば、**quay.io/myuser/my-driver:<kernelversion>** です。

4.13. KMOD イメージのビルドと署名

ソースコードがあり、最初にイメージをビルドする必要がある場合は、この手順を使用します。

次の YAML ファイルは、リポジトリのソースコードを使用して新しいコンテナイメージをビルドします。生成されたイメージは一時的な名前でレジストリーに保存され、この一時的なイメージは **sign** セクションのパラメーターを使用して署名されます。

一時的なイメージ名は最終的なイメージ名に基づいており、**<containerImage>:<tag>-<namespace>_<module name>_kmm_unsigned** に設定されています。

たとえば、Kernel Module Management (KMM) は、次の YAML ファイルを使用して、署名のない kmod を含むビルドを含む **example.org/repository/minimal-driver:final-default_example-module_kmm_unsigned** という名前のイメージをビルドし、レジストリーにプッシュします。次に、

署名された kmod を含む **example.org/repository/minimal-driver:final** という名前の 2 番目のイメージを作成します。この 2 番目のイメージは、ワーカー Pod によってプルされ、クラスターノードにロードされる kmod を含んでいます。

一時的なイメージは、署名後にレジストリーから安全に削除できます。必要に応じて再構築されます。

前提条件

- **keySecret** および **certSecret** シークレットが、残りのリソースと同じ namespace に作成されている。

手順

- YAML ファイルを適用します。

```
---
apiVersion: v1
kind: ConfigMap
metadata:
  name: example-module-dockerfile
  namespace: <namespace> ❶
data:
  dockerfile: |
    ARG DTK_AUTO
    ARG KERNEL_VERSION
    FROM ${DTK_AUTO} as builder
    WORKDIR /build/
    RUN git clone -b main --single-branch https://github.com/rh-ecosystem-edge/kernel-
module-management.git
    WORKDIR kernel-module-management/ci/kmm-kmod/
    RUN make
    FROM registry.access.redhat.com/ubi9/ubi:latest
    ARG KERNEL_VERSION
    RUN yum -y install kmod && yum clean all
    RUN mkdir -p /opt/lib/modules/${KERNEL_VERSION}
    COPY --from=builder /build/kernel-module-management/ci/kmm-kmod/*.ko
/opt/lib/modules/${KERNEL_VERSION}/
    RUN /usr/sbin/depmod -b /opt
---
apiVersion: kmm.sigs.x-k8s.io/v1beta1
kind: Module
metadata:
  name: example-module
  namespace: <namespace> ❷
spec:
  moduleLoader:
    serviceAccountName: default ❸
  container:
    modprobe:
      moduleName: simple_kmod
    kernelMappings:
      - regexp: '^.*\.x86_64$'
        containerImage: <final_driver_container_name>
    build:
      dockerfileConfigMap:
```

```

    name: example-module-dockerfile
  sign:
    keySecret:
      name: <private_key_secret_name>
    certSecret:
      name: <certificate_secret_name>
    filesToSign:
      - /opt/lib/modules/4.18.0-348.2.1.el8_5.x86_64/kmm_ci_a.ko
  imageRepoSecret: 4
    name: repo-pull-secret
  selector: # top-level selector
    kubernetes.io/arch: amd64

```

1 2 **default** は、有効な namespace に置き換えます。

3 デフォルトの **serviceAccountName** には、特権モジュールを実行するために必要な権限がありません。サービスアカウントの作成は、このセクションの関連情報の「サービスアカウントの作成」を参照してください。

4 **DaemonSet** オブジェクトの **imagePullSecrets** として使用され、ビルド機能と署名機能のプルとプッシュに使用されます。

関連情報

- [サービスアカウントの作成](#)

4.14. KMM ハブおよびスポーク

ハブおよびスポークシナリオでは、多くのスポーククラスターが中央の強力なハブクラスターに接続されます。Kernel Module Management (KMM) は、ハブおよびスポーク環境で動作するために Red Hat Advanced Cluster Management (RHACM) に依存します。

KMM は、KMM 機能の分離によりハブおよびスポーク環境と互換性があります。既存の **Module** CRD をラップし、特定のスポーククラスターに拡張するために、**ManagedClusterModule** カスタムリソース定義 (CRD) が提供されています。また、ハブクラスター上でイメージを構築し、モジュールに署名する新しいスタンドアロンコントローラーである KMM-Hub も提供されます。

ハブおよびスポークのセットアップでは、スポークはハブクラスターによって集中管理される、リソースに制約のある集中的なクラスターです。スポークは、リソースを大量に消費する機能を無効にした状態で、KMM の単一クラスターエディションを実行します。KMM をこの環境に適応させるには、ハブが高価なタスクを処理しながら、スポークで実行されるワークロードを最小限に抑える必要があります。

カーネルモジュールイメージの構築と **.ko** ファイルへの署名は、ハブ上で実行する必要があります。モジュールローダーおよびデバイスプラグイン **DaemonSet** のスケジューリングは、スポーク上でのみ実行できます。

関連情報

- [Red Hat Advanced Cluster Management \(RHACM\)](#)

4.14.1. KMM-Hub

KMM プロジェクトは、ハブクラスター専用の KMM エディションである KMM-Hub を提供します。KMM-Hub は、スポーク上で実行しているすべてのカーネルバージョンを監視し、カーネルモジュールを受け取る必要があるクラスター上のノードを決定します。

KMM-Hub は、イメージのビルドや kmod 署名などの計算集約型タスクをすべて実行し、RHACM を介してスポークに転送されるようにトリミングされた **Module** を準備します。



注記

KMM-Hub を使用してハブクラスターにカーネルモジュールをロードすることはできません。カーネルモジュールをロードするには、KMM の通常版をインストールします。

関連情報

- [KMM のインストール](#)

4.14.2. KMM-Hub のインストール

次のいずれかの方法を使用して、KMM-Hub をインストールできます。

- Operator Lifecycle Manager (OLM) の使用
- KMM リソースの作成

関連情報

- [KMM Operator バンドル](#)

4.14.2.1. Operator Lifecycle Manager を使用した KMM-Hub のインストール

OpenShift コンソールの **Operators** セクションを使用して、KMM-Hub をインストールします。

4.14.2.2. KMM リソースの作成による KMM-Hub のインストール

手順

- KMM-Hub をプログラムでインストールする場合は、次のリソースを使用して、**Namespace** リソース、**OperatorGroup** リソース、および **Subscription** リソースを作成できます。

```
---
apiVersion: v1
kind: Namespace
metadata:
  name: openshift-kmm-hub
---
apiVersion: operators.coreos.com/v1
kind: OperatorGroup
metadata:
  name: kernel-module-management-hub
  namespace: openshift-kmm-hub
---
apiVersion: operators.coreos.com/v1alpha1
kind: Subscription
metadata:
```

```

name: kernel-module-management-hub
namespace: openshift-kmm-hub
spec:
  channel: stable
  installPlanApproval: Automatic
  name: kernel-module-management-hub
  source: redhat-operators
  sourceNamespace: openshift-marketplace

```

4.14.3. ManagedClusterModule CRD の使用

ManagedClusterModule カスタムリソース定義 (CRD) を使用して、スポーククラスターでのカーネルモジュールのデプロイメントを設定します。この CRD はクラスタースコープであり、**Module** 仕様をラップし、次の追加フィールドを追加します。

```

apiVersion: hub.kmm.sigs.x-k8s.io/v1beta1
kind: ManagedClusterModule
metadata:
  name: <my-mcm>
  # No namespace, because this resource is cluster-scoped.
spec:
  moduleSpec: ❶
  selector: ❷
    node-wants-my-mcm: 'true'

  spokeNamespace: <some-namespace> ❸

  selector: ❹
    wants-my-mcm: 'true'

```

- ❶ **moduleSpec**: **Module** リソースと同様に、**moduleLoader** セクションと **devicePlugin** セクションが含まれます。
- ❷ **ManagedCluster** 内のノードを選択します。
- ❸ **Module** を作成する namespace を指定します。
- ❹ **ManagedCluster** オブジェクトを選択します。

ビルドまたは署名の命令が **.spec.moduleSpec** に存在すると、その Pod はオペレーターの namespace のハブクラスター上で実行します。

.spec.selector が1つ以上の **ManagedCluster** リソースと一致すると、KMM-Hub は対応する namespace に **ManifestWork** リソースを作成します。**ManifestWork** には、カーネルマッピングは保持されていますが、すべての **build** と **sign** サブセクションが削除された、トリミングされた **Module** リソースが含まれています。タグで終わるイメージ名を含む **containerImage** フィールドは、同等のダイジェストに置き換えられます。

4.14.4. スポーク上で KMM の実行

Kernel Module Management (KMM) をスポークにインストールしたら、それ以上の操作は必要ありません。ハブから **ManagedClusterModule** オブジェクトを作成して、スポーククラスターにカーネルモジュールをデプロイします。

手順

RHACM **Policy** オブジェクトを通じて KMM をスポーククラスターにインストールできます。OperatorHub から KMM をインストールし、軽量スポークモードで実行することに加えて、**Policy** は、RHACM エージェントが **Module** リソースを管理できるようにするために必要な追加の RBAC を設定します。

- 次の RHACM ポリシーを使用して、スポーククラスターに KMM をインストールします。

```
---
apiVersion: policy.open-cluster-management.io/v1
kind: Policy
metadata:
  name: install-kmm
spec:
  remediationAction: enforce
  disabled: false
  policy-templates:
    - objectDefinition:
        apiVersion: policy.open-cluster-management.io/v1
        kind: ConfigurationPolicy
        metadata:
          name: install-kmm
        spec:
          severity: high
          object-templates:
            - complianceType: mustonlyhave
              objectDefinition:
                apiVersion: v1
                kind: Namespace
                metadata:
                  name: openshift-kmm
            - complianceType: mustonlyhave
              objectDefinition:
                apiVersion: operators.coreos.com/v1
                kind: OperatorGroup
                metadata:
                  name: kmm
                  namespace: openshift-kmm
                spec:
                  upgradeStrategy: Default
            - complianceType: mustonlyhave
              objectDefinition:
                apiVersion: operators.coreos.com/v1alpha1
                kind: Subscription
                metadata:
                  name: kernel-module-management
                  namespace: openshift-kmm
                spec:
                  channel: stable
                  config:
                    env:
                      - name: KMM_MANAGED ❶
                        value: "1"
                  installPlanApproval: Automatic
                name: kernel-module-management
```

```

    source: redhat-operators
    sourceNamespace: openshift-marketplace
  - complianceType: mustonlyhave
    objectDefinition:
      apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1
      kind: ClusterRole
      metadata:
        name: kmm-module-manager
      rules:
        - apiGroups: [kmm.sigs.x-k8s.io]
          resources: [modules]
          verbs: [create, delete, get, list, patch, update, watch]
  - complianceType: mustonlyhave
    objectDefinition:
      apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1
      kind: ClusterRoleBinding
      metadata:
        name: klusterlet-kmm
      subjects:
        - kind: ServiceAccount
          name: klusterlet-work-sa
          namespace: open-cluster-management-agent
      roleRef:
        kind: ClusterRole
        name: kmm-module-manager
        apiGroup: rbac.authorization.k8s.io
---
apiVersion: apps.open-cluster-management.io/v1
kind: PlacementRule
metadata:
  name: all-managed-clusters
spec:
  clusterSelector: ❷
  matchExpressions: []
---
apiVersion: policy.open-cluster-management.io/v1
kind: PlacementBinding
metadata:
  name: install-kmm
placementRef:
  apiGroup: apps.open-cluster-management.io
  kind: PlacementRule
  name: all-managed-clusters
subjects:
  - apiGroup: policy.open-cluster-management.io
    kind: Policy
    name: install-kmm

```

❶ この環境変数は、スポーククラスターで KMM を実行する場合に必要です。

❷ **spec.clusterSelector** フィールドは、選択クラスターのみをターゲットにするようにカスタマイズできます。

4.15. カーネルモジュールのアップグレードのカスタマイズ

必要に応じて、ノードの再起動など、ノードでのメンテナンス操作の実行中にカーネルモジュールをアップグレードします。クラスターで実行しているワークロードへの影響を最小限に抑えるには、カーネルのアップグレードプロセスを一度に1つずつ実行します。



注記

この手順では、カーネルモジュールを使用するワークロードに関する知識が必要で、クラスター管理者が管理する必要があります。

前提条件

- アップグレードする前に、カーネルモジュールで使用するすべてのノードで **kmm.node.kubernetes.io/version-module.<module_namespace>.<module_name>=\$moduleVersion** ラベルを設定します。
- ノード上のすべてのユーザーアプリケーションワークロードを終了するか、別のノードに移動します。
- 現在読み込み済みのカーネルモジュールをアンロードします。
- カーネルモジュールをアンロードする前にユーザーワークロード (カーネルモジュールにアクセスしているクラスター内で実行されているアプリケーション) がノード上で実行していないこと、および新しいカーネルモジュールバージョンがロードされた後にワークロードがノード上で再び実行していることを確認します。

手順

1. ノード上の KMM によって管理されているデバイスプラグインがアンロードされていることを確認します。
2. **Module** カスタムリソース (CR) の次のフィールドを更新します。
 - **containerImage** (適切なカーネルバージョンに)
 - **version**
更新はアトミックである必要があります。つまり、**containerImage** フィールドと **version** フィールドの両方を同時に更新する必要があります。
3. アップグレードしているノードのカーネルモジュールを使用して、すべてのワークロードを終了します。
4. ノードの **kmm.node.kubernetes.io/version-module.<module_namespace>.<module_name>** ラベルを削除します。次のコマンドを実行して、ノードからカーネルモジュールをアンロードします。

```
$ oc label node/<node_name> kmm.node.kubernetes.io/version-module.<module_namespace>.<module_name>-
```

5. 必要に応じて、クラスター管理者として、カーネルモジュールのアップグレードに必要な追加のメンテナンスをノード上で実行します。
追加のアップグレードが必要ない場合は、**kmm.node.kubernetes.io/version-module.<module_namespace>.<module_name>** ラベル値を、**Module** の設定どおりに新しい **\$moduleVersion** に更新して、手順 3 から 6 を省略できます。
6. 次のコマンドを実行して、**kmm.node.kubernetes.io/version-module.**

`<module_namespace>.<module_name>=$moduleVersion` ラベルをノードに追加します。`$moduleVersion` は、**Module** CR の **version** フィールドの新しい値と等しくなければなりません。

```
$ oc label node/<node_name> kmm.node.kubernetes.io/version-module.  
<module_namespace>.<module_name>=<desired_version>
```



注記

ラベル名の Kubernetes の制限により、**Module** 名と namespace の組み合わせの長さが 39 文字を超えることができません。

7. ノード上のカーネルモジュールを活用するワークロードを復元します。
8. ノード上の KMM によって管理されるデバイスプラグインをリロードします。

4.16. DAY 1 カーネルモジュールのロード

Kernel Module Management (KMM) は通常、Day 2 Operator です。カーネルモジュールは、Linux (RHCOS) サーバーの初期化が完了しなければロードされません。ただし、シナリオによっては、カーネルモジュールを早い段階でロードする必要があります。Day 1 機能を使用すると、Linux **systemd** の初期化段階で Machine Config Operator (MCO) を使用してカーネルモジュールをロードできます。

関連情報

- [Machine Config Operator](#)

4.16.1. Day 1 のサポート対象ユースケース

Day 1 機能がサポートするユースケースの数は限られています。主なユースケースは、NetworkManager サービスの初期化前にツリー外 (OOT) のカーネルモジュールをロードできるようにすることです。**initramfs** 段階でのカーネルモジュールのロードはサポートされていません。

Day 1 機能に必要な条件は次のとおりです。

- カーネルモジュールはカーネルにロードされていない。
- ツリー内カーネルモジュールがカーネルにロードされているが、アンロードして OOT カーネルモジュールに置き換えることができる。これは、ツリー内モジュールが他のカーネルモジュールから参照されていないことを意味します。
- Day 1 機能が正常に機能するためには、ノードに機能するネットワークインターフェイス、つまりそのインターフェイス用のツリー内カーネルドライバが必要。OOT カーネルモジュールは、正常に機能するネットワークドライバを置き換えるネットワークドライバにできます。

4.16.2. OOT カーネルモジュールのローディングフロー

ツリー外 (OOT) カーネルモジュールのロードには、Machine Config Operator (MCO) が利用されます。フローシーケンスは次のとおりです。

手順

1. **MachineConfig** リソースを実行中の既存クラスターに適用します。更新する必要があるノードを特定するには、適切な **MachineConfigPool** リソースを作成する必要があります。
2. MCO はノードごとに再起動を適用します。再起動されたノードには、**pull** サービスと **load** サービスという 2 つの新しい **systemd** サービスがデプロイされます。
3. **load** サービスは、**NetworkConfiguration** サービスの前に実行されるように設定されています。サービスは、事前定義されたカーネルモジュールイメージをプルし、次にそのイメージを使用してツリー内モジュールをアンロードし、OOT カーネルモジュールをロードしようとします。
4. **pull** サービスは、NetworkManager サービスの後に実行されるように設定されています。サービスは、事前設定されたカーネルモジュールイメージがノードのファイルシステム上に配置されているか確認します。そのようになっている場合、サービスは正常に存在し、サーバーはブートプロセスを続行します。そうでない場合は、イメージをノードにプルし、その後ノードを再起動します。

4.16.3. カーネルモジュールイメージ

Day 1 機能は、Day 2 KMM ビルドで利用されるのと同じ DTK ベースのイメージを使用します。ツリー外のカーネルモジュールは、`/opt/lib/modules/${kernelVersion}` の配下にある必要があります。

関連情報

- [Driver Toolkit](#)

4.16.4. ツリー内モジュールの置き換え

Day 1 機能は常に、ツリー内のカーネルモジュールを OOT バージョンに置き換えようとします。ツリー内カーネルモジュールがロードされていない場合、フローは影響を受けません。サービスは続行し、OOT カーネルモジュールをロードします。

4.16.5. MCO yaml の作成

KMM は、Day 1 機能の MCO YAML マニフェストの作成に使用する API を提供します。

```
ProduceMachineConfig(machineConfigName, machineConfigPoolRef, kernelModuleImage,
kernelModuleName string) (string, error)
```

返される出力は、適用される MCO YAML マニフェストの文字列表現です。この YAML を適用するかどうかはお客様が判断します。

パラメーターは以下のとおりです。

machineConfigName

MCO YAML マニフェストの名前。このパラメーターは、MCO YAML マニフェストのメタデータの **name** パラメーターとして設定されます。

machineConfigPoolRef

ターゲットノードを識別するために使用される **MachineConfigPool** 名。

kernelModuleImage

OOT カーネルモジュールを含むコンテナイメージの名前。

kernelModuleName

OOT カーネルモジュールの名前。このパラメーターは、ツリー内カーネルモジュール (カーネルにロードされている場合) のアンロードと OOT カーネルモジュールのロードの両方に使用されます。

API は、KMM ソースコードの **pkg/mcproducer** パッケージの下にあります。Day 1 機能を使用するために KMM Operator を実行する必要はありません。必要なのは、**pkg/mcproducer** パッケージを Operator/ユーティリティコードにインポートし、API を呼び出し、生成された MCO YAML をクラスターに適用することだけです。

4.16.6. MachineConfigPool

MachineConfigPool は、適用された MCO の影響を受けるノードのコレクションを識別します。

```
kind: MachineConfigPool
metadata:
  name: sfc
spec:
  machineConfigSelector: ❶
  matchExpressions:
    - {key: machineconfiguration.openshift.io/role, operator: In, values: [worker, sfc]}
  nodeSelector: ❷
  matchLabels:
    node-role.kubernetes.io/sfc: ""
  paused: false
  maxUnavailable: 1
```

❶ MachineConfig 内のラベルと一致します。

❷ ノード上のラベルと一致します。

OCP クラスターには、事前定義された **MachineConfigPool** があります。

- **worker**: クラスター内のすべてのワーカーノードをターゲットにします
- **master**: クラスター内のすべてのマスターノードをターゲットにします

マスター **MachineConfigPool** をターゲットにするために、次の **MachineConfig** を定義します。

```
metadata:
  labels:
    machineconfiguration.openshift.io/role: master
```

ワーカー **MachineConfigPool** をターゲットにするために、次の **MachineConfig** を定義します。

```
metadata:
  labels:
    machineconfiguration.openshift.io/role: worker
```

関連情報

- [MachineConfigPool について](#)

4.17. デバッグとトラブルシューティング

ドライバーコンテナ内の kmod が署名されていないか、間違ったキーで署名されている場合、コンテナは **PostStartHookError** または **CrashLoopBackOff** ステータスに入る可能性があります。コンテナで **oc describe** コマンドを実行することで確認できます。このシナリオでは、次のメッセージが表示されます。

```
modprobe: ERROR: could not insert '<your_kmod_name>': Required key not available
```

4.18. KMM ファームウェアのサポート

カーネルモジュールは、ファイルシステムからファームウェアファイルをロードする必要がある場合があります。KMM は、kmod イメージからノードのファイルシステムへのファームウェアファイルのコピーをサポートしています。

modprobe コマンドを実行してカーネルモジュールを挿入する前に、**.spec.moduleLoader.container.modprobe.firmwarePath** の内容がノードの **/var/lib/firmware** パスにコピーされます。

Pod の終了時に **modprobe -r** コマンドを実行してカーネルモジュールをアンロードする前に、すべてのファイルと空のディレクトリーがその場所から削除されます。

4.18.1. ノードでのルックアップパスの設定

OpenShift Container Platform ノードでは、ファームウェアのデフォルトのルックアップパスのセットに **/var/lib/firmware** パスが含まれません。

手順

1. Machine Config Operator を使用して、**/var/lib/firmware** パスを含む **MachineConfig** カスタムリソース (CR) を作成します。

```
apiVersion: machineconfiguration.openshift.io/v1
kind: MachineConfig
metadata:
  labels:
    machineconfiguration.openshift.io/role: worker ❶
  name: 99-worker-kernel-args-firmware-path
spec:
  kernelArguments:
    - 'firmware_class.path=/var/lib/firmware'
```

- ❶ 必要に応じてラベルを設定できます。単一ノードの OpenShift の場合は、**control-plane** または **master** オブジェクトのいずれかを使用します。

2. **MachineConfig** CR を適用すると、ノードが自動的に再起動されます。

関連情報

- [Machine Config Operator](#)

4.18.2. kmod イメージのビルド

手順

- カーネルモジュール自体をビルドするだけでなく、バイナリーファームウェアをビルダーイメージに含めます。

```
FROM registry.redhat.io/ubi9/ubi-minimal as builder

# Build the kmod

RUN ["mkdir", "/firmware"]
RUN ["curl", "-o", "/firmware/firmware.bin", "https://artifacts.example.com/firmware.bin"]

FROM registry.redhat.io/ubi9/ubi-minimal

# Copy the kmod, install modprobe, run depmod

COPY --from=builder /firmware /firmware
```

4.18.3. モジュールリソースのチューニング

手順

- Module** カスタムリソース (CR) で `.spec.moduleLoader.container.modprobe.firmwarePath` を設定します。

```
apiVersion: kmm.sigs.x-k8s.io/v1beta1
kind: Module
metadata:
  name: my-kmod
spec:
  moduleLoader:
    container:
      modprobe:
        moduleName: my-kmod # Required

        firmwarePath: /firmware ❶
```

- ❶ オプション: `/firmware/*` をノード上の `/var/lib/firmware/` にコピーします。

4.19. DAY 0 から DAY 2 までの KMOD インストール

Kernel Module Management (KMM) を使用せずに、Day 0 から Day 2 の操作中にいくつかのカーネルモジュール (kmod) をインストールできます。これは、kmod から KMM への移行に役立ちます。

適切な kmod インストールを決定するには、次の基準を使用します。

Day 0

クラスター内でノードが **Ready** になるために必要な最も基本的な kmods。これらのタイプの kmod の例は次のとおりです。

- ブートプロセスの一部として rootFS をマウントするために必要なストレージドライバー

- マシンがブートストラップノード上の **machine-config-server** にアクセスして ignition をプルし、クラスターに参加するために必要なネットワークドライバー

Day 1

クラスター内でノードが **Ready** になるために必要ではありませんが、ノードが **Ready** のときにアンロードできない Kmods。

このタイプの kmod の例としては、**NetworkManager** が依存している間に NIC の潜在能力を最大限に活用するために、古くなったツリー内ドライバーを置き換えるツリー外 (OOT) ネットワークドライバーがあります。ノードが **Ready** の場合、**NetworkManager** の依存関係のため、ドライバーをアンロードすることはできません。

Day 2

接続性などのクラスターインフラストラクチャーに干渉することなく、カーネルに動的にロードしたり、カーネルから削除したりできる Kmod。

これらのタイプの kmod の例は次のとおりです。

- GPU Operator
- セカンダリーネットワークアダプター
- Field-Programmable Gate Array (FPGA) デバイス

4.19.1. 背景のレイヤー化

Day 0 kmod がクラスターにインストールされると、Machine Config Operator (MCO) を通じてレイヤー化が適用され、OpenShift Container Platform のアップグレードによってノードのアップグレードはトリガーされません。

ノードのオペレーティングシステムは同じままなので、ドライバーに新しい機能を追加する場合にのみ、ドライバーを再コンパイルする必要があります。

4.19.2. ライフサイクル管理

ドライバーが許可している場合は、KMM を活用して、再起動せずに kmod の Day 0 から Day 2 までのライフサイクルを管理できます。



注記

たとえば、**initramfs** ファイルの再構築が必要な場合など、アップグレードにノードの再起動が必要な場合、これは機能しません。

ライフサイクル管理には、次のいずれかのオプションを使用します。

4.19.2.1. kmod をツリー内ドライバーとして扱う

kmods をアップグレードする場合は、この方法を使用します。この場合、kmod をインツリードライバーとして扱い、**inTreeRemoval** フィールドを持つクラスター内に **Module** を作成して、古いバージョンのドライバーをアンロードします。

kmod をインツリードライバーとして扱う場合の次の特性に注意してください。

- KMM が選択されたすべてのノードで同時に kmod をアンロードおよびロードしようとする、ダウンタイムが発生する可能性があります。
- これは、KMM が単一の Pod を使用してドライバーをアンロードおよびロードするため、ドライバーを削除するとノードの接続が失われる場合に機能します。

4.19.2.2. 順序付きアップグレードの使用

順序付きアップグレード (ordered_upgrade.md) を使用すると、kmod がすでにロードされているため、効果のない kmod を表すクラスター内にバージョン管理された **Module** を作成できます。

順序付きアップグレードを使用する場合は、次の特性に注意してください。

- アップグレードのペースと同時にアップグレードされるノードの数を制御できるため、クラスターのダウンタイムは発生しません。したがって、ダウンタイムのないアップグレードが可能になります。
- ドライバーをアンロードするとノードへの接続が失われる場合、この方法は機能しません。これは、KMM がアンロード用とロード用に 2 つの異なるワーカー Pod を作成するためです。これらの Pod はスケジュールされません。

4.20. KMM のトラブルシューティング

KMM インストール問題のトラブルシューティングを行う場合、ログを監視して、どの段階で問題が発生したかを判断できます。次に、その段階に関連する診断データを取得します。

4.20.1. Operator のログの確認

次の例のように **oc logs** コマンドを使用すると、Operator のログを確認できます。

KMM コントローラーのコマンド例

```
$ oc logs -fn openshift-kmm deployments/kmm-operator-controller
```

KMM Webhook サーバーのコマンド例

```
$ oc logs -fn openshift-kmm deployments/kmm-operator-webhook-server
```

KMM-Hub コントローラーのコマンド例

```
$ oc logs -fn openshift-kmm-hub deployments/kmm-operator-hub-controller
```

KMM-Hub Webhook サーバーのコマンド例

```
$ oc logs -fn openshift-kmm deployments/kmm-operator-hub-webhook-server
```

4.20.2. イベントの観察

KMM イベントを表示するには、次の方法を使用します。

ビルドとサイン

KMM は、kmod イメージのビルドを開始するたびに、またはその結果を確認するたびにイベントをパブリッシュします。このイベントは、**Module** オブジェクトにアタッチされ、次の例のように、**oc describe module** コマンドの出力の最後に表示されます。

```
$ oc describe modules.kmm.sigs.x-k8s.io kmm-ci-a
[...]
Events:
  Type    Reason          Age           From Message
  ----    -
Normal    BuildCreated    2m29s        kmm    Build created for kernel 6.6.2-201.fc39.x86_64
Normal    BuildSucceeded  63s          kmm    Build job succeeded for kernel 6.6.2-201.fc39.x86_64
Normal    SignCreated     64s (x2 over 64s) kmm    Sign created for kernel 6.6.2-201.fc39.x86_64
Normal    SignSucceeded   57s          kmm    Sign job succeeded for kernel 6.6.2-201.fc39.x86_64
```

モジュールのロードまたはアンロード

KMM は、ノード上でカーネルモジュールを正常にロードまたはアンロードするたびにイベントをパブリッシュします。このイベントは、**Node** オブジェクトにアタッチされ、次の例のように、**oc describe node** コマンドの出力の最後に表示されます。

```
$ oc describe node my-node
[...]
Events:
  Type    Reason          Age    From Message
  ----    -
[...]
Normal    ModuleLoaded    4m17s  kmm    Module default/kmm-ci-a loaded into the kernel
Normal    ModuleUnloaded  2s     kmm    Module default/kmm-ci-a unloaded from the kernel
```

4.20.3. must-gather ツールの使用

oc adm must-gather コマンドは、サポートバンドルを収集してデバッグ情報を Red Hat サポートに提供するための推奨される方法です。次のセクションで説明するように、適切な引数を指定してコマンドを実行し、特定の情報を収集します。

関連情報

- [must-gather ツールについて](#)

4.20.3.1. KMM のデータの収集

手順

1. KMM Operator コントローラーマネージャーのデータを収集します。

- a. **MUST_GATHER_IMAGE** 変数を設定します。

```
$ export MUST_GATHER_IMAGE=$(oc get deployment -n openshift-kmm kmm-operator-controller -ojsonpath='{.spec.template.spec.containers[?(@.name=="manager")].env[?(@.name=="RELATED_IMAGE_MUST_GATHER")].value}')
$ oc adm must-gather --image="${MUST_GATHER_IMAGE}" -- /usr/bin/gather
```



注記

KMM をカスタム namespace にインストールしている場合は、**-n <namespace>** スイッチを使用して namespace を指定します。

- b. **must-gather** ツールを実行します。

```
$ oc adm must-gather --image="${MUST_GATHER_IMAGE}" -- /usr/bin/gather
```

2. Operator ログを表示します。

```
$ oc logs -fn openshift-kmm deployments/kmm-operator-controller
```

例4.1 出力例

```
I0228 09:36:37.352405      1 request.go:682] Waited for 1.001998746s due to client-side
throttling, not priority and fairness, request:
GET:https://172.30.0.1:443/apis/machine.openshift.io/v1beta1?timeout=32s
I0228 09:36:40.767060      1 listener.go:44] kmm/controller-runtime/metrics
"msg"="Metrics server is starting to listen" "addr"="127.0.0.1:8080"
I0228 09:36:40.769483      1 main.go:234] kmm/setup "msg"="starting manager"
I0228 09:36:40.769907      1 internal.go:366] kmm "msg"="Starting server" "addr"=
{"IP":"127.0.0.1","Port":8080,"Zone":""} "kind"="metrics" "path"="/metrics"
I0228 09:36:40.770025      1 internal.go:366] kmm "msg"="Starting server" "addr"=
{"IP":"","Port":8081,"Zone":""} "kind"="health probe"
I0228 09:36:40.770128      1 leaderelection.go:248] attempting to acquire leader lease
openshift-kmm/kmm.sigs.x-k8s.io...
I0228 09:36:40.784396      1 leaderelection.go:258] successfully acquired lease
openshift-kmm/kmm.sigs.x-k8s.io
I0228 09:36:40.784876      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="Module" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io" "controllerKind"="Module"
"source"="kind source: *v1beta1.Module"
I0228 09:36:40.784925      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="Module" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io" "controllerKind"="Module"
"source"="kind source: *v1.DaemonSet"
I0228 09:36:40.784968      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="Module" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io" "controllerKind"="Module"
"source"="kind source: *v1.Build"
I0228 09:36:40.785001      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="Module" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io" "controllerKind"="Module"
"source"="kind source: *v1.Job"
I0228 09:36:40.785025      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="Module" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io" "controllerKind"="Module"
"source"="kind source: *v1.Node"
I0228 09:36:40.785039      1 controller.go:193] kmm "msg"="Starting Controller"
"controller"="Module" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io" "controllerKind"="Module"
I0228 09:36:40.785458      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="PodNodeModule" "controllerGroup"="" "controllerKind"="Pod" "source"="kind
source: *v1.Pod"
I0228 09:36:40.786947      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="PreflightValidation" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="PreflightValidation" "source"="kind source: *v1beta1.PreflightValidation"
I0228 09:36:40.787406      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="PreflightValidation" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="PreflightValidation" "source"="kind source: *v1.Build"
```

```

I0228 09:36:40.787474      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="PreflightValidation" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="PreflightValidation" "source"="kind source: *v1.Job"
I0228 09:36:40.787488      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="PreflightValidation" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="PreflightValidation" "source"="kind source: *v1beta1.Module"
I0228 09:36:40.787603      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="NodeKernel" "controllerGroup"="" "controllerKind"="Node" "source"="kind
source: *v1.Node"
I0228 09:36:40.787634      1 controller.go:193] kmm "msg"="Starting Controller"
"controller"="NodeKernel" "controllerGroup"="" "controllerKind"="Node"
I0228 09:36:40.787680      1 controller.go:193] kmm "msg"="Starting Controller"
"controller"="PreflightValidation" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="PreflightValidation"
I0228 09:36:40.785607      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="imagestream" "controllerGroup"="image.openshift.io"
"controllerKind"="ImageStream" "source"="kind source: *v1.ImageStream"
I0228 09:36:40.787822      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="preflightvalidationocp" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="PreflightValidationOCP" "source"="kind source:
*v1beta1.PreflightValidationOCP"
I0228 09:36:40.787853      1 controller.go:193] kmm "msg"="Starting Controller"
"controller"="imagestream" "controllerGroup"="image.openshift.io"
"controllerKind"="ImageStream"
I0228 09:36:40.787879      1 controller.go:185] kmm "msg"="Starting EventSource"
"controller"="preflightvalidationocp" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="PreflightValidationOCP" "source"="kind source:
*v1beta1.PreflightValidation"
I0228 09:36:40.787905      1 controller.go:193] kmm "msg"="Starting Controller"
"controller"="preflightvalidationocp" "controllerGroup"="kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="PreflightValidationOCP"
I0228 09:36:40.786489      1 controller.go:193] kmm "msg"="Starting Controller"
"controller"="PodNodeModule" "controllerGroup"="" "controllerKind"="Pod"

```

4.20.3.2. KMM-Hub のデータ収集

手順

1. KMM Operator ハブコントローラーマネージャーのデータを収集します。
 - a. **MUST_GATHER_IMAGE** 変数を設定します。

```

$ export MUST_GATHER_IMAGE=$(oc get deployment -n openshift-kmm-hub kmm-
operator-hub-controller -ojsonpath='{.spec.template.spec.containers[?
(@.name=="manager")].env[?
(@.name=="RELATED_IMAGE_MUST_GATHER")].value}')
$ oc adm must-gather --image="${MUST_GATHER_IMAGE}" -- /usr/bin/gather -u

```



注記

KMM をカスタム namespace にインストールしている場合は、**-n <namespace>** スイッチを使用して namespace を指定します。

b. **must-gather** ツールを実行します。

```
$ oc adm must-gather --image="${MUST_GATHER_IMAGE}" -- /usr/bin/gather -u
```

2. Operator ログを表示します。

```
$ oc logs -fn openshift-kmm-hub deployments/kmm-operator-hub-controller
```

例4.2 出力例

```
I0417 11:34:08.807472    1 request.go:682] Waited for 1.023403273s due to client-side
throttling, not priority and fairness, request:
GET:https://172.30.0.1:443/apis/tuned.openshift.io/v1?timeout=32s
I0417 11:34:12.373413    1 listener.go:44] kmm-hub/controller-runtime/metrics
"msg"="Metrics server is starting to listen" "addr"="127.0.0.1:8080"
I0417 11:34:12.376253    1 main.go:150] kmm-hub/setup "msg"="Adding controller"
"name"="ManagedClusterModule"
I0417 11:34:12.376621    1 main.go:186] kmm-hub/setup "msg"="starting manager"
I0417 11:34:12.377690    1 leaderelection.go:248] attempting to acquire leader lease
openshift-kmm-hub/kmm-hub.sigs.x-k8s.io...
I0417 11:34:12.378078    1 internal.go:366] kmm-hub "msg"="Starting server" "addr"=
{"IP":"127.0.0.1","Port":8080,"Zone":""} "kind"="metrics" "path"="/metrics"
I0417 11:34:12.378222    1 internal.go:366] kmm-hub "msg"="Starting server" "addr"=
{"IP":"::","Port":8081,"Zone":""} "kind"="health probe"
I0417 11:34:12.395703    1 leaderelection.go:258] successfully acquired lease
openshift-kmm-hub/kmm-hub.sigs.x-k8s.io
I0417 11:34:12.396334    1 controller.go:185] kmm-hub "msg"="Starting EventSource"
"controller"="ManagedClusterModule" "controllerGroup"="hub.kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="ManagedClusterModule" "source"="kind source:
*v1beta1.ManagedClusterModule"
I0417 11:34:12.396403    1 controller.go:185] kmm-hub "msg"="Starting EventSource"
"controller"="ManagedClusterModule" "controllerGroup"="hub.kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="ManagedClusterModule" "source"="kind source: *v1.ManifestWork"
I0417 11:34:12.396430    1 controller.go:185] kmm-hub "msg"="Starting EventSource"
"controller"="ManagedClusterModule" "controllerGroup"="hub.kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="ManagedClusterModule" "source"="kind source: *v1.Build"
I0417 11:34:12.396469    1 controller.go:185] kmm-hub "msg"="Starting EventSource"
"controller"="ManagedClusterModule" "controllerGroup"="hub.kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="ManagedClusterModule" "source"="kind source: *v1.Job"
I0417 11:34:12.396522    1 controller.go:185] kmm-hub "msg"="Starting EventSource"
"controller"="ManagedClusterModule" "controllerGroup"="hub.kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="ManagedClusterModule" "source"="kind source: *v1.ManagedCluster"
I0417 11:34:12.396543    1 controller.go:193] kmm-hub "msg"="Starting Controller"
"controller"="ManagedClusterModule" "controllerGroup"="hub.kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="ManagedClusterModule"
I0417 11:34:12.397175    1 controller.go:185] kmm-hub "msg"="Starting EventSource"
"controller"="imagestream" "controllerGroup"="image.openshift.io"
"controllerKind"="ImageStream" "source"="kind source: *v1.ImageStream"
I0417 11:34:12.397221    1 controller.go:193] kmm-hub "msg"="Starting Controller"
"controller"="imagestream" "controllerGroup"="image.openshift.io"
"controllerKind"="ImageStream"
I0417 11:34:12.498335    1 filter.go:196] kmm-hub "msg"="Listing all
ManagedClusterModules" "managedcluster"="local-cluster"
I0417 11:34:12.498570    1 filter.go:205] kmm-hub "msg"="Listed
ManagedClusterModules" "count"=0 "managedcluster"="local-cluster"
```

```

I0417 11:34:12.498629    1 filter.go:238] kmm-hub "msg"="Adding reconciliation
requests" "count"=0 "managedcluster"="local-cluster"
I0417 11:34:12.498687    1 filter.go:196] kmm-hub "msg"="Listing all
ManagedClusterModules" "managedcluster"="sno1-0"
I0417 11:34:12.498750    1 filter.go:205] kmm-hub "msg"="Listed
ManagedClusterModules" "count"=0 "managedcluster"="sno1-0"
I0417 11:34:12.498801    1 filter.go:238] kmm-hub "msg"="Adding reconciliation
requests" "count"=0 "managedcluster"="sno1-0"
I0417 11:34:12.501947    1 controller.go:227] kmm-hub "msg"="Starting workers"
"controller"="imagestream" "controllerGroup"="image.openshift.io"
"controllerKind"="ImageStream" "worker count"=1
I0417 11:34:12.501948    1 controller.go:227] kmm-hub "msg"="Starting workers"
"controller"="ManagedClusterModule" "controllerGroup"="hub.kmm.sigs.x-k8s.io"
"controllerKind"="ManagedClusterModule" "worker count"=1
I0417 11:34:12.502285    1 imagestream_reconciler.go:50] kmm-hub "msg"="registered
imagestream info mapping" "ImageStream"={"name":"driver-
toolkit","namespace":"openshift"} "controller"="imagestream"
"controllerGroup"="image.openshift.io" "controllerKind"="ImageStream"
"dtkImage"="quay.io/openshift-release-dev/ocp-v4.0-art-
dev@sha256:df42b4785a7a662b30da53bdb0d206120cf4d24b45674227b16051ba4b7c393
4" "name"="driver-toolkit" "namespace"="openshift"
"osImageVersion"="412.86.202302211547-0" "reconcileID"="e709ff0a-5664-4007-8270-
49b5dff8bae9"

```